



戦後80周年記念事業

松本と鹿児島をつなぐ 特攻から考える平和学習

2025.10.25-27

参加者レポート

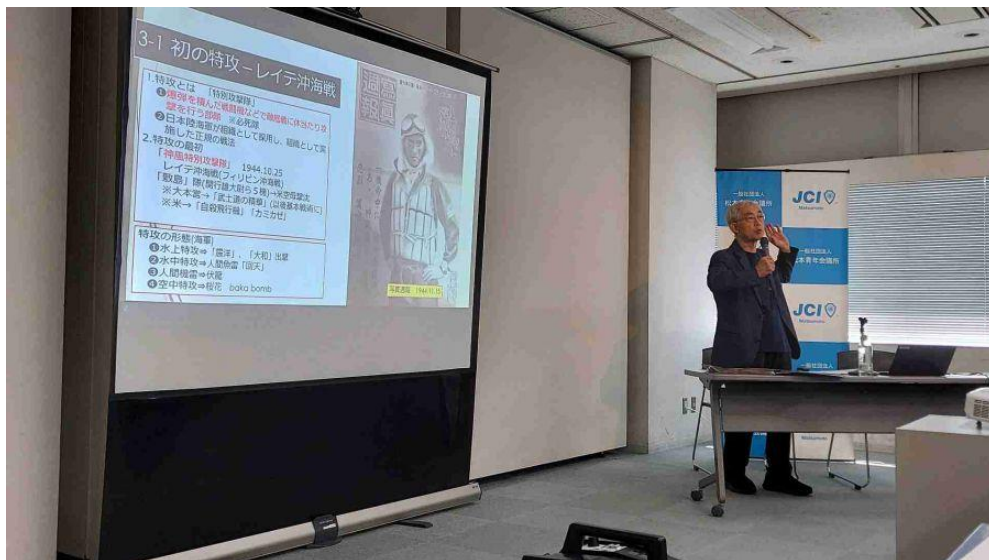
主催 松本市 / 一般社団法人松本青年会議所

第1フェーズ「事前学習会」

- 1 開催日
令和7年9月28日（日）午前10時～正午
- 2 会場
松本市中央公民館（Mウイング） 3-1、3-2会議室
- 3 参加者
76名（現地学習参加者、関係者、一般参加者ほか）
- 4 内容
オリエンテーション、近現代史研究家 大日方 悦夫 氏による講義 等

講義「今、『特攻』の歴史から何を学ぶかー過去の悲劇から行動する未来へ」

講師：大日方 悦夫 氏



第2フェーズ「現地学習（平和視察団）」

	時 間	項 目	備 考
10月25日 (土)	12:20	信州まつもと空港ロビー集合・出発式	
	13:20～15:00	信州まつもと空港 ⇒ 鹿児島空港	FDA
	15:50～16:45	鹿児島空港 ⇒ 万世特攻平和祈念館	貸切バス
	16:50～17:50	万世特攻平和祈念館 見学（講話含む）	
	18:00～18:30	万世特攻平和祈念館 ⇒ 夕食会場	貸切バス
	18:40～19:30	夕食	
	19:45～	宿泊	
10月26日 (日)	8:00～ 8:20	ホテル ⇒ 平和会館バス駐車場	貸切バス
	8:30～ 9:30	広域戦跡めぐり（ガイド付）	貸切バス
	9:30～10:30	周辺戦跡めぐり（ガイド付）	徒歩
	11:00～12:30	知覧特攻平和会館 見学（講話含む）	
	13:00～13:50	昼食・知覧茶体験	
	14:00～16:00	学びの学習発表会（地域住民との交流）	
	16:00～17:00	ホテル館「富屋食堂」 見学	
	17:00～18:00	南九州市内 ⇒ 鹿児島市内	貸切バス
	18:00～19:00	夕食	
	19:00～	宿泊	
10月27日 (月)	8:45～ 9:00	ホテル ⇒ 仙巖園	貸切バス
	9:00～ 9:50	仙巖園	
	10:00～12:20	仙巖園 ⇒ 熊本空港	貸切バス
	13:30～14:55	熊本空港 ⇒ 信州まつもと空港	FDA
	15:20	信州まつもと空港ロビー・解散式	



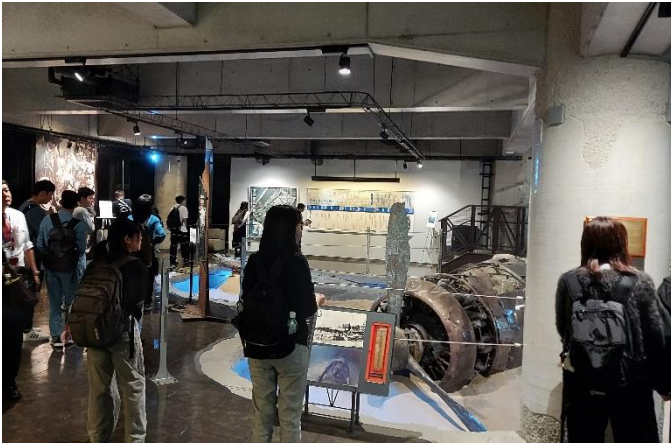
現地写真

1日目

出発式（信州まつもと空港）



万世特攻平和祈念館 見学



伝承者講話



2日目

戦跡巡り



知覧特攻平和会館 見学



伝承者講話



ホテル館「富屋食堂」



学びの学習発表会（地域住民との交流）



松本市平和視察団と知覧特攻平和会館・南九州市観光協会・
ツーリズム協議会・日本茶ソムリエ会・観光ガイドの皆様



3日目

仙巖園（尚古集成館）



第3フェーズ「活動報告会」

- 1 開催日
令和7年11月16日（日）午後3時15分～午後5時10分
- 2 会場
松本市中央公民館（Mウイング） 6階ホール
- 3 参加者
約140名（現地学習参加者、関係者、一般参加者ほか）
- 4 内容
事業参加者による学習内容の共有（事業説明・感想発表）、パネルディスカッション



戦後80周年記念事業
「松本と鹿児島をつなぐ 特攻から考える平和学習」
現地学習参加者（松本市平和視察団）

1 松本市内の小学生～20代（42名）

No.	学校・職業	学 年	氏 名
1	松本深志高校	1 年	眞田 隆之介
2	松本深志高校	1 年	見浦 雅光
3	松本深志高校	1 年	吉江 優樹
4	松本深志高校	1 年	吉長 慧悟
5	島内小学校	4 年	岩下 泰治
6	松島中学校	3 年	長澤 育飛
7	信大附属松本小学校	3 年	霜野 瑛一郎
8	長野工業高等専門学校	1 年	赤澤 陽斗
9	松本県ヶ丘高校	1 年	渡邊 奏太
10	松本美須々ヶ丘高校	1 年	平林 祐人
11	松本秀峰中等教育学校	1 年	小池 智之
12	松本県ヶ丘高校	1 年	山崎 花峰
13	松本美須々ヶ丘高校	1 年	大澤 悠
14	松本秀峰中等教育学校	1 年	古田 真琴
15	エクセラン高校	1 年	田中 創太
16	松本秀峰中等教育学校	1 年	中山 紗希
17	松本秀峰中等教育学校	2 年	大門 凜
18	松商学園高校	2 年	小林 瑞季
19	松本県ヶ丘高校	2 年	駒形 明日夢
20	松本秀峰中等教育学校	2 年	我妻 秀都
21	松本深志高校	2 年	望月 美里
22	松本美須々ヶ丘高校	2 年	二木 怜弥
23	松本県ヶ丘高校	2 年	前村 陽太郎
24	信濃むつみ高校	2 年	リベラカルナーラトゥヌ 海渡
25	松本美須々ヶ丘高校	2 年	竹内 大将
26	松本県ヶ丘高校	2 年	藤岡 絢香
27	松本県ヶ丘高校	2 年	飯島 慎一
28	松本工業高校	3 年	前澤 洋太郎
29	立命館大学	4 年	花村 美海
30	信州大学	4 年	小林 泰智
31	松本秀峰中等教育学校	1 年	星野 愛里
32	信州大学	1 年	星野 航河
33	信濃むつみ高校	3 年	小金丸 哲
34	信州大学	2 年	村井 和夢
35	信州大学	2 年	田中 里奈
36	公務員		藤森 智子
37	自営業		胡桃沢 和矢
38	公務員		土屋 茜
39	公務員		吉越 涼香
40	会社員		松下 龍市
41	会社員		市川 遼太
42	会社員		大場 匠弥

2 一般参加・関係者（29名）

No.	所属等	学 年	氏 名
1	松本市副市長（団長）		伊佐治 裕子
2	松本青年会議所理事長（副団長）		金井 佑輔
3	一般参加		長澤 裕子
4	一般参加		霜野 南都美
5	一般参加		江田 真由美
6	一般参加		我妻 華生
7	一般参加		安藤 佳織
8	一般参加		太田 かおり
9	一般参加		星野 みゆき
10	一般参加		小金丸 恵理子
11	一般参加		清水 英昭
12	一般参加		飯島 直美
13	一般参加		平川 賀雄
14	一般参加		坂本 和子
15	一般参加		坂本 寿男
16	一般参加		平林 正浩
17	松本市総務部長		田中 史郎
18	松本市平和推進課		小沢 智也
19	松本青年会議所		小林 祐華
20	松本青年会議所		岩下 治弘
21	松本青年会議所		上條 僚士
22	松本青年会議所		小岩井 昌門
23	松本青年会議所		山本 篤司
24	松本青年会議所		久保 信也
25	松本青年会議所		増田 春樹
26	松本青年会議所		高山 未央
27	松本青年会議所		山元 秀一郎
28	松本青年会議所		澤地 雅弘
29	松本青年会議所		下川 愛見

夢を眺める

松本深志高校 1 年
眞田 隆之介

① 現地学習で特に印象に残ったこと

現地で知った、特攻兵士達が特攻で散っていくまでの物語や短かった命の中で出会った大切な人達へ馳せる想いが自分の中では最も心に残っている。特攻兵士たちは、最年少の 17 歳から最年長の 32 歳まで多くの若者達が全国各地から集められ組織された。知覧特攻平和会館や万世特攻平和祈念館ではそんな彼らの生の声、生の想いが綴られた実際の手記を読んだ。彼ら兵士達は境遇から生まれ育った環境までそれぞれが全く違うにも関わらず、それらのどの手記にも家族へのいままでの感謝や大切な人を心配する思いが一語一語くつきりと綴られていた。彼らの今までの短かった人生をかみしめるような言葉達は、受け止めるにはあまりにも重たいものだ。しかしその多くの手記の中から溢れ出てくる兵士達が自分の命を捨ててでもして家族や大切な人、祖国を守らなくてはならないという強い使命感を感じたことは今の社会からは想像もつかない深く心を打つものだった。

そしてこの現地学習の中でも富屋食堂の物語は涙無しで聞くことは出来ないくらい悲しく、印象に残るものだった。その中の一つに宮川兵士の話がある。悪天候の中たった一機で沖縄へ出撃していった宮川兵士は生前、富屋食堂の女将の鳥濱トメに「蛍になって会いに行くからね」と言い残していた。そして宮川さんが出撃していった翌日の夜、季節外にも関わらずたった一匹の蛍が食堂に飛んできた……。若き兵士とトメさんや地元の少年・少女達が出会い、触れ合い、恋心を抱き、多くの夢を眺めた食堂ではそうした数々の悲しく儚い物語が残されていて、そのすべてが自分の一生忘れられない記憶として残った。彼らはいつも夢を眺めていた。まだ出会えていない自分の彼女になる人に思いを馳せたり、家族と幸せに過ごすこと、子供の成長を見ること、僕らにとって当たり前なすべてを彼らはただ夢として眺めることしか出来なかった。それは特攻兵士達だけではなく戦争を生きた人たちが同じだったはずだ。僕らは彼らのためにどうやって生きられるのだろうか。今の社会は、彼らの夢を見つめ返してやれているのだろうか。

「なぜ生き残ったのか考えなさい 何かあなたがなくてはならないことがあって生かされたのだから 一鳥濱トメ」

鳥濱トメは身銭を切ってまでしていよいよ最期を迎える兵士たちに愛情を注いでいた。そんな彼女の生き様を知ったうえでこの言葉に触れると、自分たちが自由に生きることがいかにありがたいか、そしてこれからの未来を彼らの分を背負って創っていく使命感を強く感じる。

② 平和のために私ができること

平和のために今私が出来ることは、過去の過ちを今に伝えることだと思う。過去の記憶は誰もそれを受け継がなければいずれ消えてなくなってしまう。鳥濱トメが二度と同じ過ちを繰り返してはならないと死ぬまで兵士たちの墓を参拝したように、そのバトンを今度は自分たちの手で未来へ受け継いでいかなければならない。

僕は探求の時間で、そうした平和継承に関する取り組みを行っていきたいと思っている。自分は実際に現地に赴くことで悲惨さなどを身に染みて体感したが、何も知らない人にいきなりそのことを伝えるのは簡単なことではないと思う。これからを担う小学生や中学生、さらには世界の人に戦争の悲惨さを伝えていく。この難しいチャレンジを劇なども織り交ぜながら内容のある講演にして届くことが、今自分が平和の為に出来ることのはずだ。

だから特攻で散った兵士たちの分も背中に背負って、取り組んでいきたい。

現地学習を通して感じたこと

松本深志高校 1 年
見浦 雅光

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は、特攻についての現地学習に参加し、実際に戦争があった跡を見ていく中で、多くのことを感じました。その中でもとくに印象に残ったことは、主に二つあります。

一つ目は、特攻隊員が書き残した遺書です。資料館の遺書には、家族への感謝やこれからの健康を願うこと、国の明るい未来を確信していることが多く綴られていました。確かに、大切に育ててくれた親に、大人になって親孝行をすることができないまま飛び立ってしまうのは、とても悔しくて切ないことだと感じました。そんな中、自分ができる最大限の親孝行が、死を恐れたり、国の愚痴を言うのではなく、家族や国の健やかな未来を願うことだったのかなと思いました。彼らのことを考えると、胸が締め付けられるように感じました。

二つ目は、現地の方のお話でよくお聞きした、「特攻は攻撃戦ではなく防御線だった」という言葉です。死ぬことは特攻に於いての成功であり、生きて返ってくることは失敗として見られていました。それなのに、特攻の目的は敵の陣地に攻めていくのではなく、日本の陣地に攻めてくる敵を防ぐことでした。これには私は、とても驚きました。確かに、国の勝利は大切かもしれませんが、しかし、国の防御のために命を捧げてしまうのは、あまりにも理にかなっていません。命は何よりも尊く大切にしなければならないと思うのに、その天秤でさえ狂わせてしまう戦争は、とても残酷であってはならないと強く思いました。

私は、現地にたつて、風に触れて、当時の空を見上げたとき、平和な日常がどれだけ尊いかを改めて感じました。今回の学習を通して、戦争は確かに現実であり、それは人と人とを分断させ、命の価値観さえ変わってしまうものだと思いました。

② 平和のために私ができること

今年で終戦から 80 年が経って、戦争の経験を直接聞くことが困難になってしまいました。なので、私たちが戦争の経験を聞くことができるギリギリの世代であることを自覚し、積極的に戦争の経験を聞き、それをお互いに共有しあい、経験を風化させないことが大切だと思います。また、相手の文化や歴史を理解しないまま接し、なにかズレが生じると、あの国の文化は理解できない、あの人は意味が分からないなどと対立的になり戦争や喧嘩になってしまうのが、グループや国家同士の交流でありがちなことだと思います。なので、きちんとコミュニケーションを取ることで戦争を防ぐことができると思います。そのために、まずはいろんな文化や言語を知ること重要だと思います。

見て学ぶ平和学習

松本深志高校 1 年
吉江 優樹

① 現地学習で特に印象に残ったこと

鹿児島県を訪れて、特攻隊について学ぶ三日間を過ごした。その中で、特に印象に残ったことが三つある。

一日目に行った万世特攻平和記念館では、特攻兵の持ち物の中に「自決用の短刀」が展示されていた。これは、もし不時着して敵に捕まったとき、自分で命を絶つためのものだと言われていた。僕はそれを見て、せっかく命が助かったのに、意味もなく自決するなんて、命がもったいないと思った。生きていれば、家族に会えたかもしれないし、戦争が終わったあとに普通の生活に戻れたかもしれない。命を軽く扱うような考え方が、戦争の恐ろしさを物語っているように感じた。

二日目には、広域戦跡を巡った。その中でも、三角兵舎跡や掩体壕を見たことが心に残っている。三角兵舎は兵士たちが寝泊まりしていた場所で、狭くて質素な作りだった。掩体壕は、飛行機を敵の攻撃から守るための施設で、土を盛って飛行機を隠していた。実際にその場所に立ってみると、当時の兵士たちがどんな環境で生活していたのかがよく分かった。

そして二日目の最後に訪れた富屋食堂では、とめさんの言葉が心に残った。「なぜ生き残ったのか考えなさい。何かあなたにしなければならないことがあって生かされたのだから。」という言葉聞いて、自分が生きている意味について考えさせられた。命には役割があるのかもしれないと思った。

② 平和のために私ができること

平和のために、まずは身近な人を大切にしたいと思う。友達や家族との間で、思いやりのある言葉や行動を心がけることが、争いを減らす第一歩だと思う。また、ニュースや本などで世界のことを知るようにして、戦争や差別について考えることも大切だと思う。知らないままだと、無関心になってしまうからだ。小さなことでも、自分にできることを続けていけば、少しずつ平和につながっていくと思う。まずは自分のまわりから、優しさを広げていきたい。

鹿児島県の現地学習を通して学んだことや考えたこと

松本深志高校 1 年
吉長 慧悟

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は現地学習の二日目に、知覧特攻平和会館の展示を見ました。そこでは日本人が特攻をするときに使った工夫や、特攻隊員が書き残した血書や遺書、最後の手紙などが展示されていました。私はその平和会館では、特攻隊員が飛び立つ前に書き残した家族への手紙を読んだりしました。その手紙の中には、このようなことが書かれていました。特攻をして、この世を去ってしまう私の死でお母さんが悲しむのならば、私は4000人のアメリカ人の母親を泣かせます。この文章を読んだときに、私の体に寒気がしました。なぜなら、母親のための復讐で、4000人ほどの命を一回の飛行でとってしまう特攻が恐ろしく感じたからです。アメリカ軍に空襲で家を焼かれたから、それを復讐するために特攻をすると書き残した隊員もいました。ただ単に、大日本帝国のために、と特攻するのではなく、復讐のために命を犠牲にした人たちもいたということを実感しました。また、兄弟の面倒をしっかりと見てほしいと書き残した隊員もいました。兄弟に喧嘩をするな、お母さんの言うことをしっかりと聞く、そして勉強にしっかりと励んでと書き残していました。兄弟の面倒をしっかりとみてくれたお兄さんだったことを感じられます。このような、未来のあった若い人たちが、なぜ特攻という絶対に生きて帰ってこれないことをしなくてはならなかったのか、と疑問を持ちました。なぜ日本は、絶対防衛圏が敗れたらアメリカに負けるとわかっていたのに、敗れた時に降参せずに、多くの犠牲者を出して、本土決戦に持ち込もうとしたのだろうか。そしてなぜ日本は、原爆が落とされるまで、その体制を変えようとしなかったのか。私は現地学習で、第二次世界大戦で日本が行ってきたことやそれに参加していた人たちの気持ちをしれて、戦争というものの全体像をつかめるようになりました。

② 平和のために私ができること

平和のために私ができることは、戦争が起こった理由などを理解して、意識することです。歴史的対立や社会的分断、そして戦争などが及ぼす影響を理解することで、私たちは人々同士の対立の表面だけではなく、原因となる根っこの問題を対処することができます。私は、今回の現地学習で学んだことを生かして、身の回りの人の戦争に対する教養を高めて、戦争のもととなる課題を解決していきたいと思います。また、日本が戦争をしていた時期は、日本のトップが軍人に支配されていた時なので、そのようなことが起こらないように、私たちは政治や子供の教育に関心を持つことが大切です。私は選挙に投票できる年齢になったら、平和のために適切なリーダーを選びたいです。

鹿児島で学んだ戦争のこと

島内小学校 4 年
岩下 泰治

① 現地学習で特に印象に残ったこと

ぼくが印象に残ったこと。戦争の話を読んだりすること以外にも飛行機に乗って現地まで行くことで日本が特攻作戦などをしてきたことが印象に残りました。17 歳くらいの若い人たちも特攻をしていって一人一人の命が無くなることを家族の人たちしか悲しまないことが悲しく印象に残りました。戦争の恐ろしさのことをもっと知りたかったので行ったら戦争のことをたくさん知れてその時のこととかも知れたのでそういうことが印象に残りました。特攻作戦とその方法を教えてくれた時特攻に選ばれた人が可哀想と印象に残りました。広島県では原爆ドームがあることを知ってたけど沖縄県でも時間稼ぎの戦いがあるというところが印象にのこりました。時間稼ぎのためにこんな多くの人を特攻に行かせて死んでいるのが可哀想と印象に残りました。沖縄県の戦争は被害がすごく多くてたくさんの人達が死んでしまっていて悲しい戦争だなという印象に残りました。これでぼくが印象に残ったことは終わりです。

② 平和のために私ができること

クラスの人とかにもなるべく戦争とはどう恐ろしいものなのかを伝えていくことができると思います。鹿児島で勉強してきたことを友達とかに聞かれたら詳しく答えてあげて教えることができると思います。このことが勉強でもいかせるということができると思います。

現地で僕が学んだこと

松島中学校 3 年
長澤 育飛

① 現地学習で特に印象に残ったこと

僕が現地学習で特に印象に残っていることは「知覧特攻平和会館の展示」です。知覧特攻平和会館には知覧から特攻作戦に飛び立った人たちの遺影や遺言、所持品や実際の特攻作戦に使用された飛行機などたくさんのものが展示されていました。僕はその展示品をみて言葉を失いました。展示品は戦争の悲惨さを伝えるものだらけでした。僕は特攻隊員が実際に最後に残した遺書を読んでもみました。遺書に書いてあることは人それぞれでした。両親への感謝や兄弟への言葉、恋人へのお別れなどが書いてありました。僕はその遺書を読んでもし自分が特攻に行くことになって遺書を書くことになったら誰に何と書くのかを考えました。僕はこの遺書が家族や恋人に感謝を伝えられる最後のチャンスだと思います。遺書のほかにも海に沈んでいた零戦も展示されていました。その零戦は弾痕がとてもあり戦争の怖さが伝わってきました。そして、平和会館の人の話で僕はとても心に残っている言葉があります。それは「特攻に行く前の隊員の写真がみんな笑顔なのは上の人から絶対に笑顔で写れと言われていたから」という言葉です。僕は以前からなんでみんな笑顔なんだろうと疑問を抱いていました。その疑問が解けました。でも、自分なら絶対に笑顔でいられないと思います。今から自分は特攻に行って死ぬとわかっているのに笑顔でいられるのはとてもすごいと思います。僕は戦争に参加した人たちをとても尊敬しています。今回僕は現地学習に参加してたくさんの学びを得ました。今回得た学びを忘れることなく今ある平和な暮らしを戦争で戦死してしまった人たちの分まで続けていきたいです。

② 平和のために私ができること

僕が今回現地で学んだことを自分の中だけで終わらせるだけではなくほかの人に今回学んだことを伝えて 80 年前の悲惨な出来事をけして絶やさないで伝えていきたい。僕も今回学んだことを忘れないで自分の今後に生かしていきたい。これからも戦争のことや平和について学び続けてもっと戦争に詳しくなって 80 年前の戦争に参加した人たちが叶えられなかった願いなどを思って生きていきたい。また、僕が今回現地学習で学んだことをほかの人にたくさん伝えてもっともっと戦争について知ってもらいたい。そして、もっとたくさんの人に戦争の残酷さを知ってもらいたい。僕には人に伝えることしかできないから自分にできることをやってもう二度と戦争が起こらない平和な生活が続けたい。

知覧へ行って思ったこと

信大附属松本小学校3年
霜野 瑛一郎

① 現地学習で特に印象に残ったこと

・こわいと思ったこと

戦争で大学生くらいの年れいの人が特攻に行き、まだ20才くらいの若い人が人生を思い切りすごせず、亡くなった人がたくさんいたことを知って、とても悲しくなりました。

・知覧平和祈念館で遺書を読んで思ったこと

特攻作戦が知られてしまうことはだめなので、遺書が家族に届くのは、作戦の何日後かにしてあるのが悲しいと思いました。どうしてかということ、家族や友人がその人の遺書がすぐ読めないのは悲しいです。時間がたっていたら、きっと止めに行くこともできません。

お母さん、お父さんあての内容で、「今まで育ててくれてありがとうございました。」と書いてありました。それを読んで、もう死ぬとわかっているときもお父さんたちに書いた気持ちを想像すると、読むのが切なかったです。

・三角兵舎の見学で

次の日は特攻に行って死ぬという場所で一晩寝るのは怖そうだと思います。私は、ここには行きたくないと思いました。

・はやぶさを見て

特攻の飛行機はばくだん250kg、ねん料250kgを積んで飛んでいくということでした。思っていたより大きな飛行機でした。片道分しかねん料がないと聞き、悲しくなりました。

・見学を終えて

若い人が特攻に行って、沢山亡くなったことを資料館から学びました。沢山のぎせい者が出る戦争は、すごくいけないことだと思います。

② 平和のために私ができること

平和を守るために必要なことは、平和の大事さを考えることだと思います。

戦争で起こることが、自分のことや、家族のこととして考えることだと思います。

お父さんが戦争へ行ったらどんな気持ちか、担任の先生が、戦争へ行ったらどんな気持ちになるか、友達が戦争で死んだら？と想像すると、自然と戦争はだめなことだとわかると思います。

知覧・万世と特攻の記憶

長野工業高等専門学校 1 年
赤澤 陽斗

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は、知覧特攻平和会館、万世特攻平和記念館で聞いた話が特に印象に残っています。知覧・万世では、多くの特攻兵の皆さんの写真を見ながら、その方のエピソードをお聞きしました。その中でも、穴澤大尉と伍井大尉のお話が心に残りました。穴澤大尉には恋人が、伍井大尉には3人の子供がいました。穴澤大尉の遺書には恋人に対して、「会いたい。話したい。」という言葉があり、今では当たり前に行えることですら、穴澤大尉にとっては心から願うことだったのだと痛感しました。また、伍井大尉には、当時生まれたばかりの子供、吉則くんがいました。彼に向けた遺書には、母を困らせないこと、勉強に励むことなど、将来を思う言葉がつづられていて、吉則くんの育つ姿を見たかったのだろうと、しみじみと感じました。世の中では国のために死ぬ狂人だと言う人もいますが、私は特攻に行かれた方々は、皆大切な人を守りたいと思う一心だったのだろうと思いました。

② 平和のために私ができること

私は、これからも戦争遺跡や戦争の第一資料に触れ、戦争についての正しい知識を身に着け、自分から情報を発信する場を設けることが、今の自分にできる精いっぱい努力だと思いました。今、当時の様子や生活を知っている人が高齢化し、ほとんどが100歳に近く、戦争を伝えられることができる「語り部」が少なくなってきてしまっています。あと10年もすれば、数えるくらいの人しか残らないかもしれない、生の声を直接聞くことが出来なくなってしまうのです。しかも、多くの人は意識しなければ戦争の記憶を聞くことなどないでしょうし、インターネットに乗っている情報によっては、間違った知識を持ってしまうかもしれません。だからこそ、正しい知識を身に着け、歴史を伝えていく。それこそが、命をかけて散っていった方々のために、私ができることだと思いました。

無題

松本県ヶ丘高校1年
渡邊 奏太

① 現地学習で特に印象に残ったこと

現地での学習で、まるで僕は映画の中の一部を見ているような気持ちになりました。遺書を見ても、「家族のために征きます。」や、「感謝を伝えられていないことが心残りです。」「蛍になって戻ってきます。」など、今では考えられないような言葉ばかりでした。特攻について、初めて知ったわけではありませんが、現地学習において初めて特攻の真実に触れたと思います。また、遺書の中では、特攻について肯定的な言い方がほとんどでしたが、やはり特攻に行きたくない人も多数いたのではないかと思います。戦争で国のために死ぬことはほとんどの職業軍人にとって名誉だと思います。しかし、徴兵されて特攻に向かわされた人が多数おり、中には大学生や、高校生の年齢層の人々もいて、未来への希望を奪ってしまったということも、決して忘れてはいけません。出撃前の笑顔の写真も印象に残っています。これから死ぬという宣告をされておきながら、なぜあんなにも綺麗な笑顔が作れるのか。もちろん、軍部から写真は笑顔で映れという命令はありましたが、それでも、引き攣ってしまったりはすると思います。その笑顔の奥には何が隠されているのか、本当のことはわかりませんが、この遺影も、忘れられないものの一つです。今回、地元の方々と喋る機会がありました。割と戦争の時代に近い、高齢な世代の方々でした。父が出征したという方は、戦争のことについては、終戦してすぐの頃は全然話してくれなかった。とおっしゃっていました。特攻に限らず、戦争のことは当事者にとって思い出したくないものだそうです。こうやって戦争のことを学んでいるのも、その気持ちを乗り越えて話してくださる方がいらっしゃるからだと思い、感謝の気持ちが絶えません。

② 平和のために私ができること

何ができるか、と考えたときに、今すぐにできることは周りの人たちにこの事実を伝えることだと思います。無知より怖いものはないというように、周りの人たちも知っていた方が良く、知っていてほしいです。そうすれば、もしかしたらロシアによるウクライナへの侵攻、ガザ地区の紛争などの、今現在起こっている戦争について見方、考え方が変わるかもしれないし、特攻に限らず、世界各地で繰り広げられた第2次大戦、はたまたその前の第一次大戦、ベトナム戦争、湾岸戦争、様々な戦争の歴史についても、興味が出てくるかもしれません。一つ学ぶ、知ることによって、そこから興味が派生し、たくさんを知ることができると思います。こうやって、戦争の悲惨さ、平和の大切さを学んでいけばいいのではないかと、思いました。これは平和のためであるとは言えないかもしれませんが、夢半ばで倒れてしまった人もいます。人生大切にしようと思いました。

無題

松本美須々ヶ丘高校 1 年
平林 祐人

① 現地学習で特に印象に残ったこと

僕はこの現地学習でたくさんの事を学びました。その中でも特に印象に残っていることが三つあります。

一つ目は万世特攻平和記念館で見た「子犬を抱いた少年飛行兵」という大きな写真です。この写真は昭和 20 年 5 月 26 日に晩成飛行場で撮られた写真です。出撃予定の 26 日の午後 2 時ごろ搭乗機を見守っていた時に万世基地の整備隊長が拾ってきた野良犬の子犬がやってきます。隊長は幼少期犬を飼っていたそうで名前がチロだったため子犬に「チロ、チロ」と呼びかけて抱き抱えたそうです。すぐに他の隊員もやってきて子犬を囲みました。特に印象に残っているのが、全員出撃を二時間後に控えているとは思えないようなとても穏やかな表情をしています。この時の彼らはどんな事を思っていたのか…いろんな思いが湧いて来ました。とても心に印象深く残っています。

二つ目は地域住民の方との交流会の時にガイドさんから聞いた話です。そのガイドさんのお爺さんが当時戦争に行っていたそうです。しかし、戦争の話は戦争から帰ってきてもあまりしてくれなかったそうです。そして長い年月が経ってようやく話をしてくれた時に「なぜ、あまり話をしてくれなかったのか」と聞いたそうです。おじいさんは「戦争では何人も人を殺してきた。その自分がどうしてもどうしても悔しくて戦争の話ができなかった」とおっしゃったそうです。そして、ガイドさんは僕に「戦争の英雄とはなんだと思う？」聞きました。僕は「戦争でたくさん活躍した人…ですか??」と答えました。そうすると「確かにそうだね。しかし、戦争で活躍した人というのはたくさん人を殺したということにならないかい？当時は戦争でたくさん活躍した人は讃えられていたけど私のお爺さんはそこに矛盾を感じていたと話していたよ。」と教えてくれました。これに僕はとても驚きました。当時、英雄として讃えられた人たちはどんな思いで讃えられていたのか…そしてこのようなことは現地の人と交流をしなければわからなかったことなのでとても貴重な話を聞くことができ良かったと思います。

三つ目は知覧特攻平和記念館で見た資料についてです。隊員検索システムで自分の住んでいるところから特攻に行った兵士の人はいるのか気になり、検索してみたところ、1 人の隊員がヒットしました。僕はとても驚きました。長野県なんて鹿児島から遠く離れているし人口の少ないこんなところから行った人なんていないよね…なんて思いながら検索したら本当にいたのです。それと同時に、やはりここでもこんなに身近な人が戦争に行っていたのだと驚きました。僕の曾祖父も戦争の時に航空機の軍需工場で右手の指三本を失う事故に巻き込まれてしまいました。当時は家族もみんな悲しい思いをしたそうです。曾祖父からもあまり軍需工場の話はしてもらえませんでした。今回の研修で戦争の悲惨さを自分の目で見て感じる事ができました。

② 平和のために私ができること

平和のために私たちができることはたくさんあると思います。

その中でも今回の研修で現地の方々から聞いた話や第一次資料から見たこと感じたことを周りの人に話すことだと思います。

今回行った幾つもの戦争遺跡だったり、記念館は長野県からふらっと行ける距離になるので、まずは家族や友達に今回学んだ事実や、感じたことを話したいと思います。

そして、次のステップでは学校の何らかの授業だったり、第三者に向けて発表していきたいと思います。

実際に歴史の授業では先生から「知覧に行った感想を発表してほしい」と頼まれ、クラスメイトや先生たちに見て聞いて感じたことを伝えることができました。その中で、友達が、「零戦に興味があって、でも、知覧は遠すぎて行けないから実際の写真や感想を聞けてよかった！」という感想をもらいました。

平和のために私たちができることとして第一歩を踏み出せたと思います。

生々しい戦争の痕跡

松本秀峰中等教育学校 4 年
小池 智之

① 現地学習で特に印象に残ったこと

万世平和祈念館では、語り部の方の話を通じて、戦争の悲惨さや当時の人々の心情に深く触れることができた。特に、若くして命を散らした兵士たちが残した遺書には、家族への思いや葛藤、覚悟がにじみ出ており、胸が締めつけられるような思いがした。一人ひとりの言葉には重みがあり、戦争が単なる歴史的事実ではなく、確かに生きていた人々の人生そのものであったことを実感した。

その後訪れた知覧では、特攻隊の出撃に使われた実物の戦闘機や遺品などを見学した。機体の小ささや構造の簡素さから、命を懸けて飛び立った若者たちの現実がより鮮明に浮かび上がった。展示されていた写真や手紙からは、彼らがどのような思いで出撃に臨んだのかが伝わってきて、戦争の残酷さと同時に、平和の尊さを改めて考えさせられた。

今回の訪問を通じて、戦争に対する知識だけでなく、歴史を自分ごととして捉える視点が養われたように感じる。過去の出来事を学ぶことは、未来をより良くするための第一歩であり、平和の大切さを次の世代に伝えていく責任があると強く思った。今後もこのような学びの機会を大切に、歴史への理解を深めていきたい。

② 平和のために私ができること

私が平和のためにできることは、過去の戦争や争いの歴史を学び、それを周囲に伝えることだと思う。語り部の話や資料館での体験を通じて得た知識や感情を、家族や友人と共有することで、平和の尊さを広めることができる。また、日常の中で他者を思いやり、対話を大切にする姿勢を持つことも、争いを防ぐ第一歩となる。小さな行動でも、積み重ねることで社会全体の意識を変える力になると信じている。

空を飛んで

松本県ヶ丘高校1年
山崎 花峰

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私はこの旅を通して、現地に赴いて初めて理解できることがたくさんあるのだということ強く感じました。私は今まで飛行機に乗ったことがなく、今回の旅で初めて空へと飛び立った時にはとても感動しました。航空写真でしか見たことのなかった景色を肉眼で見ることができ、涙が出そうになりました。現地に着いてからも、万世特攻平和祈念館や知覧特攻平和会館などの多くの戦争遺跡を訪れ、平和について深く考えさせられました。特に私の印象に残ったのは、特攻兵の方々の様々なエピソードです。

バスガイドさんのお話で、「特攻の母」と呼ばれていた鳥濱トメさんのことを初めて知りました。彼女が経営していた富屋食堂は軍指定の食堂であり、そこで特攻隊員の身の回りの世話をしていたそうです。富屋食堂は現在「ホタル館」と名前を変えて資料館になり、特攻兵たちとトメさんの話を語り継いでいます。国のために、大切な人のために、あるはずだった未来を捨てて機体に入り込んだ特攻兵たちは、どんなことを思っていたのでしょうか。次々に飛び立っていく特攻兵の青年たちの世話をしながら、トメさんは何を感じ取っていたのでしょうか。残念ながら、亡くなられた方々と直接話をすることはできません。しかし、彼らが遺した手紙や言葉、所持品から、その気持ちや情景を推し量ることならできます。

戦後80年が経ち、戦争を経験した人が着実に数を減らしていつている今、平和のありがたみを身近に感じる機会は減っています。しかし、そんな世の中だからこそ特攻兵たちの遺した数々の物から声なき声を聞き取り、平和について考えていくことが大切だと強く感じました。それこそが未来を切り開く私たちが背負うべき「責任」なのです。

② 平和のために私ができること

私が飛行機に乗って感動することができたのも、こうして歴史について学び未来に活かすことができるのも、過去の先人たちが命を賭して戦い抜いてくださったおかげだということを忘れることなく生きていきたいと改めて感じました。私は、この地球に生きる全ての人が平和や戦争について考えるべきだと思います。そのためには、これまでに起きた様々な出来事を学び、知り、向き合っていくべきです。これからは戦争についての正しい知識を身につけ、それを周囲の人に伝えていきたいと思います。そして、今後多くの方が現地に赴き戦争の歴史を正しく理解してほしいと強く願います。

知覧に行って思ったこと

松本美須々ヶ丘高校1年
大澤 悠

① 現地学習で特に印象に残ったこと

僕が知っていた特攻は特攻一部だったということです。最初は特攻というものは特攻する飛行機が飛んで行って艦体に突撃するというものだと思っていました。しかし現地で説明してもらった特攻は特攻機を守る飛行機と一緒に飛んで行って空中戦をしたり、特攻隊員をお世話する女学生がいたりといろいろな人が関わっていることを知りました。誰一人として特攻隊員が死んでもいいと思うことは無かったのでその飛行機を見送っている人たちも悲しんでいて辛いだろうなと思いました。今の教科書には特攻機が戦艦に体当たりする所しか載っていないのもっとちゃんとした説明を入れて欲しいなと思います。僕はもっと鹿児島で聞いたこと見たことをしっかり周りの人に伝えていきたいと思います。特攻に行った人たちの中には本当に志願して行った人もいますが大多数は半強制的に行かされた人達が多いです。本当はもっと生きていきたいのに死ななければならなく、もっとやりたかったことが出来ずに死んでしまったのでその人たちがしたかったことを自分たちが出来ればいいなと思います。また特攻に行く前に書いた遺書などを読むと、沢山の遺書にお母さんお父さんと書いてあったのでやっぱり無念があったんだなと思い、胸がキューツとなりました。僕と歳が近い人も沢山特攻機に乗って死んでしまう特攻は本当に残酷だなと思いました。知覧では現地の人たちとも交流しました。戦跡巡りでは実際に使われていた油脂庫や弾薬庫にアメリカの飛行機に撃たれたあとがしっかり残っており、戦争の武器の脅威を身にしみて感じました。他にも特攻兵が寝泊まりをする三角兵舎なども見て、過酷な環境の中で頑張ってくれてたんだなと思いました。僕はこのような特攻などの残酷なことを普通と思ってやってしまう戦争は起こしてはいけないと思いました。

② 平和のために私ができること

平和のために僕たちができることは、鹿児島で学んできたことを正しく伝えていくことです。2日目に特攻平和会館で聞いた語り部の方のお話がとても分かりやすかったので、それを目指していこうと思います。僕の曾祖父は戦争を経験していますが、僕はその事についての話は聞いたことがないので戦争とは関係ないと思っていました。今回の学習会を経て戦争に関心を持ったので、友だちに戦争の正しい知識などを教えていきたいです。また特攻で死んでしまった人達の平均年齢は21.6歳で僕と歳の近い人たちも大勢死んでいってしまったので特攻で死んでしまった人達のやりたかったことを僕たちが成し遂げられればいいなと思います。

特攻隊から学ぶこと

松本秀峰中等教育学校 4 年
古田 真琴

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は 10/25～27 日に鹿児島に行き、特攻隊について学んできました。その学びの中で私が印象に残ったことは三つあります。

一つ目は、特攻隊の中には 17 歳という年齢で参加している方がいたことです。特攻隊の正式名称は特別攻撃隊と言われ、別名「必死隊（必ず死ぬ隊）」と呼ばれています。その特攻隊員の中に私と同年代の人がいたことにとっても驚きました。また、さらに驚いたのは自ら望んで特攻隊に志願した人がいることです。当時は「お国のため」と言って多くの若者が特攻隊に志願しました。特攻隊の中には 10 代の特攻隊員のみで編成された少年隊もあり、その多くが散華しました。

二つ目は特攻にも三つの種類があることです。特攻には航空特攻・水上特攻・水中特攻の三つの種類があります。航空特攻はよく知られており、最も亡くなった人が多い特攻です。航空特攻と反対にあまり知られていないですが、水上特攻では約 1300 人、水中特攻では 550 人が亡くなっています。あまり知らなかった水上・水中特攻について知れたのはよかったと思います。

三つ目は特攻隊員の中にも生き残った人がいることです。生き残った人のほとんどはエンジンの故障などにより近くの島に不時着。次の指示を待っているときに終戦を迎えるという例が多くありました。昔、特攻隊に入っていた人から直接当時のお話を聞けることはとても貴重な経験だと実感し、その人のお話を聞く中で、印象に残っているのが女学校の生徒と特攻兵とのかかわりです。特攻隊員たちは出撃命令が来るまで三角兵舎に入り、寝食を共に過ごします。女学校の生徒は「なでしこ隊」として特攻隊員の世話をしていました。そんな彼女たちが一人でいくのはさみしいからと特攻隊員一人一人に手作りのお守りをあげたそうです。そして特攻隊員の突撃の日、女学校の生徒は桜の枝を持ってお見送りしたそうです。わたしが女学校の生徒の気持ちを察することはとてもできないけど、きっと想像できないくらい、苦しい思いだったと思います。私は、そんな彼女たちの思いを映した一枚の写真がとても印象に残っています。

② 平和のために私ができること

私が平和のためにできることはそう多くはないと思っています。しかしより多くの人に平和の大切さを知ってもらいたいと考えています。そのためには平和の大切さを発信すること。戦争体験者の経験を聞き、それを多くの人へ伝えることが大切だと思っています。今では戦争自体を体験している人が少なくなり、若い世代は戦争はやってはいけないの一言で終わってしまい、本当の戦争の恐ろしさを知らないでいます。そのため、戦争の語り部として話してくれている人の言葉をしっかりと若い世代につないで行くことが大切だと実感しました。今も世界では戦争や紛争などの尊い命が失われています。私は戦争をもうやってほしくないという思いをしっかりと持ち、平和の大切さを若い世代につないでいきたいと思っています。これが今の私にできる平和の道への第一歩だと思います。

平和学習を通じて考える戦争

エクセラン高校 1 年
田中 創太

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回の平和学習で印象に残ったのはやはり知覧特攻平和会館と万世特攻平和会館の展示品です。

万世特攻平和会館、知覧特攻平和会館、その両方で 1 番目を引いたのは遺書です。特攻隊の最年少は 17 歳、僕と 1 歳上の方がこの国、育ててくれた親を思って遺書はまだ 10 代の文には思えませんでした。

② 平和のために私ができること

まだ 16 歳の私が平和のために何ができるのか帰った日の夜に考えてみましたが、何も浮かびませんでした。

しかし学校の先生に話してみたところ、今度は『語り手』になってみたらどうだと言われました。

今まで私は『聞き手』でした。戦争について学び、それだけでしたが、これからは『語り手』として 80 年前この国は戦火の渦に巻き込まれていたという事実を『聞き手』に語ろう、そう思いました。

鹿児島知覧で学んだこと

松本秀峰中等教育学校 4 年
中山 紗希

① 現地学習で特に印象に残ったこと

現地学習で私が特に印象に残ったことは、2 日目の知覧特攻平和会館周辺戦跡めぐりだった。知覧平和公園についてガイドさんがついてくれて、ひとつひとつ丁寧に当時の状況を教えてくださった。最初に見たのは2つの銅像だった。1つは特攻隊員の銅像で、沖縄の方向を向いているらしく表情はとても凛としているように見え、覚悟を感じた。もう1つは隊員の母として慕われていたとめさんの像だった。少し切ない表情に見えて何度も特攻隊員を見送ったとめさんの気持ちは計り知れないものだったのだと思う。次に実際に使われていた飛行機を再現したものが何個かあった。安全とは程遠く見え特攻するのに特化した作りだった。その後三角兵舎を見た。ここに来る前、実際に三角兵舎があった場所に行ったが、そこまで大きいわけではなかったが、40人程の隊員が残りの2、3日を過ごした場所らしい。ここでは隊員同士寄せ書きを書きあったり家族への遺書を残したりして過ごしていたそうだ。普段は日本のために勇ましい姿を見せてくれていた隊員達だが、特攻をするために飛び立った後の三角兵舎の枕は濡れていることがあったらしい。このエピソードを聞いて全員が自ら日本のために命を捧げているわけではないのだと感じた。それでも前を向き戦ってくれた隊員さん達にかっこよさを感じると共に感謝の気持ちが溢れるばかりだ。

最後に知覧特攻平和会館に行った。ここではまず館の方の話を聞いた。館の方は当時の戦争の状況などを話してくださった。太平洋戦争が勃発し、日本側が苦しくなり、このままでは勝てないという状況になり特攻作戦に切り替えたそう。全体の半数以上が知覧から飛び立ったそうだ。隊員の平均は21歳。右の翼の下に250kgの爆弾、左には燃料タンクが積んであったそうで、約650km先にある沖縄へ飛び立ったそうだ。特攻前日の夜は明日死んでしまうことの恐怖や不安で多くの隊員が涙を流したそうだ。だが、戦争に苦しんでいる人は隊員だけではなく、突撃を見送る役目があるなでしこ隊や、息子達を応援して見守っている隊員の両親達でもある。館の方が話してくださったのを聞いてより戦争のことをしれた気がした。その後館内を見て回った。館内には突撃して行った隊員達の遺書がたくさん飾ってあり、映像が見れるところもあった。遺書は少し前の言葉だから読めない部分もあったけど、どれも共通して親への感謝が綴られていた。私は遺書を見てどんな気持ちでこの手紙を書いていたのだろうと思った。日本を背負い特攻することに誇りを持っていた人もいただろうし明日への恐怖に震えていた人もいただろうと思う。改めてここで聞いたお話とこの遺書を見て今平和に生きられているこの環境は決して当たり前では無いし感謝しなければいけないと思った。日頃からお世話になっているたくさんの人に感謝を言える人になりたいと鹿児島に行つて学べた。

② 平和のために私ができること

平和のために私ができることは実際に80年前に起きたことをただの出来事にしないということだ。私が実際そうであったように戦争がどういうものだったのかをあまり明確にはしない方がきっと沢山いると思う。戦争から時が流れれば流れるほど私たちの記憶からは薄れてしまうからだ。これは仕方がないことだけれど、戦争が二度と起きないようにもっと若い世代に戦争のことを伝えていかないといけないと思った。今回このような機会を与えてくださった方々に感謝をしながら現地に学びに行くことで得た知識をどのような形になるか分からないけど伝えていきたい。そして、今のままでは難しいことだけれど日本だけでなく世界中に戦争の怖さが広めていくことができればいいなと思った。

わたしの戦争

松本秀峰中等教育学校 5 年
大門 凜

① 現地学習で特に印象に残ったこと

特攻兵の人たちが遺した遺書。

手紙をみる前までは達筆な簡単には読めない字を想像していたが、実際にみていると、読みやすく厳格で、彼らの決意が垣間見えるものであった。

一つ一つの手紙には家族や恋人への感謝、別れの言葉、そして死への覚悟がありありと綴られ、書き手の一人一人の存在をととても近くに感じられた。

これらの手紙は特攻に行く前の青年たちが、大切な周りの人へ遺したものであり、まさか 80 年経って、顔を見たことも話したこともない私たちに読まれるとは思ってもみないだろう。

私だったら、最期に最愛のひとに送った手紙を不特定多数の人々に承認なく読まれるのは苦痛だ。

知覧特攻平和会館にはたくさんの遺書がおかれていた。

遺族の方の許可を取っておかれているそうだが、それは送られた側の許可であって、書いた本人のものではない。

もしかしたら本人はととても私的なことをかいていて、たとえ検閲でみられることがあったとしても、送った相手以外にはみられなくなかったかもしれない。

歴史的に見れば、一つ一つの手紙はただの“史料”でしかない。

しかし、私にとっては“史料”ではなく、特攻に行った一人一人の青年と私とを結び、青年たちがたった今私に語りかけているようであった。

ときに私は、書き手の妹になり、母になり、恋人であった。

それはとても苦痛であった。

どれだけ想っても、どれだけ悔やんでも、青年たちはとびつたてしまっているから、私のこえは届かない。

私は、心に穴が空いたような、今にも泣きだしそうな、けれども泣くのは違うような、今すぐにでも逃げ出したい、そんな思いになった。

家にかえっても、消化できない想いにおぼれてしまい、レポートがなかなか手につかず、母に毎晩話を聴いてもらっている。

話していると、涙があふれて止められなくなる。

私の戦争の悲しみは 80 年たった“いま”始まったようだ。

② 平和のために私ができること

私は戦争に関する話題がきらいだ。

戦争はひとを変え、ひとを醜くするものだからだ。

痛くて、苦しくて、たくさんのものを奪ってしまうからだ。

本来、私はこの事業に参加するべきではなかったのかもしれない。

私は、戦争がなくなることはないと思う。

戦争と呼ばなくても、世の中には日々、小さな争いが起きている。

私ができることは少ない。

しかし私は、私であるという役割を全力で担いたい。

事実・真実を見分けられる目を養いたい。

世の中にはたくさんの情報がある。

いいこと、わるいこと、目をそむけたくなるようなこと、飛びつきたくなるほど魅力的なこと、そのすべてを“わたし”というフィルターにかけ、そのなかから自分がおもう正しい情報を選べるようになりたい。

それが平和につながると信じるから。

1つの視点からでは見えないもの

松商学園高校2年
小林 瑞季

① 現地学習で特に印象に残ったこと

特攻平和館を見学して、特攻隊員の方々の遺書や手紙を読み、本当に心が締め付けられました。どの手紙も特攻へ出る少し前に書かれたものだと思うと、その一文字一文字に込められた想いの重さを強く感じました。展示されている遺書や遺品を見ていくうちに、文字の力強さや紙の質感からも、その場でしか感じ取れない迫力や真剣な想いが伝わってきました。たくさんの遺書の中には、家族や恋人、友人、先生など、それぞれ宛てる相手が違い、一人一人が守りたい大切な人を想いながら出撃していったことがわかりました。私は今まで、特攻に対して「なぜそんなことをしなければならなかったのか」という疑問や、マイナスな印象ばかりを持っていました。けれど今回、特攻へ行った人たちの手紙にふれ、「国のため」だけでなく「愛する人を守りたい」という強い想いがあったことに気づきました。

そのあと訪れた富屋食堂では、トメさんが特攻へ向かう若者たちを最後まで見守り、「特攻の母」と呼ばれるほど尽くしていたことを知りました。トメさんの優しさや行動からも、人を想う心の大切さを感じました。特攻隊員の方たちにとって、トメさんの存在は心の支えであり、短い時間でも「生きている温かさ」を感じられる大切な場所だったのだと思いました。

また、班のみんなと特攻について話し合いをする中で、私は今まで一つの視点からしか物事を見ていなかったことに気づきました。戦争の悲しさや残酷さだけでなく、その中で懸命に生き、誰かを想い続けた人々の姿を知ることで、「平和」とは何かを改めて考えるきっかけになりました。特攻は決して正しいことではありませんが、そこにあった人々の想いや背景を知ることで、戦争についてより深く考えることができました。これからは、物事を一方向からではなく、いろいろな立場や気持ちを考えて受け止め、二度と同じ過ちを繰り返さないように生きていきたいです。

② 平和のために私ができること

三日間を通して、戦争で多くの人が苦しみ、大切な人を失ったことを思うと、今の平和がどれほど貴重なものかが分かりました。平和は当たり前ではなく、私たち一人一人の行動から生まれてくるものだと思います。私は、過去の出来事をもっと詳しく学び、物事を一方向からではなく、いろいろな立場や気持ちを考えて受け止め、同じことを繰り返さないようにしたいです。また、今の世界で起きていることにも関心を持ち、悲しい出来事を他人事にせず、できることを考えていきたいです。そして、身近な人に優しく接し、思いやりの心を大切にしながら、平和を守るためにできることを続けていきたいです。

鹿児島と特攻

松本県ヶ丘高校2年
駒形 明日夢

① 現地学習で特に印象に残ったこと

まず印象に残ったことは特攻という戦い方の惨さです。私は学校の探究活動で特攻について調べていて、戦後80周年記念事業にも探究活動の一環として参加しました。探究活動のテーマとして特攻を選定しているので自分でも特攻について調べていました。でもそれはただ調べていた気になっていただけだったということを万世特攻平和祈念館、知覧特攻平和会館に行って思い知らされました。遺書や寄せ書き、海から引き上げられたり、復元された機体を見た途端に、自分の考えは甘く、薄く、そして本当の”特攻”というものがどれほど惨いものだったかを知りました。私は若人が飛び立ち死にに行く姿を遺書越しに感じ、その姿に圧倒され、生々しい惨さをこれでもかと感じました。

次に特攻兵の写真の笑顔です。ほかから隊の写真は有名で私も見たことがありますし、知覧特攻平和会館の講演中にも、あの五人と犬の写真がスクリーンに映し出されました。私は鹿児島に来るまでに、死ぬ直前の特攻兵がなぜ笑顔で写真に写っているのかが疑問でした。写真に写るときは笑顔を徹底させられていたらしいですが、それでも自分が死ぬとわかっていながら笑顔を見せることは私には到底できないでしょう。人間は死ぬ直前、家族のことを思い出すらしいです。僕は彼らの笑顔に、彼らの家族への最後の思いと意志を感じた気がしました。

最後は海から引き上げられた零戦です。知覧特攻平和会館に展示されていた零戦は不時着して何十年も海に沈んでいて、それを引き上げたもので、私はなぜかその零戦から目が離せませんでした。機体の損傷は主に錆なのですが、銃弾の跡にも思えるその損傷になぜか痛ましさを覚え、戦争の悲惨さを痛感しました。

② 平和のために私ができること

私は探究活動で特攻を演じるという、特攻兵を主人公にし特攻を主軸にした作品を書き、台本化して朗読劇として演じるという活動をしようと考えています。戦争の悲惨さを知らない高校生だからこそその平和への思いを伝えられると思い、この探究をしたいと考えました。まずこの探究が平和教育の一端を少しでも担えればよいと思います。

次に私は高校の歴史教諭になりたいと考えています。昔から歴史に興味があって、戦後80周年記念事業も自分が師となることも考えて応募しました。自分の教え子に戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを少しでも教えてあげたいという所存です。

この2点が平和のために私ができることだと考えます。

16歳だから語れること

松本秀峰中等教育学校2年
我妻 秀都

① 現地学習で特に印象に残ったこと

資料の損失や情報操作が激しい戦中の歴史を正確に振り返るのは難しい様にも思われる。しかし、兵士が軍部に渡らないよう内密に世話係の女学生等に託した家族宛の手紙には真意が込められており、散華された兵士の名前・出身・年齢・隊・当時の官位・搭乗機・出撃時間などに誤りや偽りは少ないだろう。昨年度は一時加工を施した荒茶生産量が1位、今年が一番茶の荒茶生産量が初1位という意外な茶のイメージを持った鹿児島県。空から見下ろした最初の印象は人工林であった。降り立った霧島を含めた始良流域地域のみならず、万世特攻平和祈念館が位置する南さつま市や特攻平和会館の所在する南九州市・知覧町にもスギやヒノキの人工林が多いらしい。三大砂丘で日本最長の吹上浜（47km）には飛砂防止のため25kmのクロマツ林が備えられた。最初に訪れた万世飛行場跡は、昭和18年夏から昭和19年末にかけて吹上浜南端部に建設された。特攻作戦の増加に伴い、知覧飛行場を補助する目的があった。『万世』は、GHQ占領下の1946年に、日本政府が当用漢字表の内閣告示を発するまで、『萬世』という旧字が使われていた。大正14年の町制移行で、萬之瀬川と加世田から字をとった萬世町が成立し、1972年には慰霊碑に『よろずよに』と刻まれた。この読み方は万葉集にも見られ、『いつまでも、永遠に』という意味である。九州から出撃した特攻部隊は振武隊と呼ばれ、台湾から出撃した誠飛行隊と名称が異なる。満洲国や他県で編成された振武隊も多く、徳之島の浅間飛行場などに前進した隊もあるが、萬世から出撃して散華された特攻隊員は121柱。その多くが沖縄を目指し、知覧からは約650kmを2時間半かけて飛び立った。萬世から20kmと近い知覧飛行場は、昭和15年から大刀洗飛行場の分校として建設され、16年からその分教場として開校した。当初から特攻のために作られたのではない。大隈半島・鹿屋には海軍第5航空艦隊司令部が置かれていたが、昭和20年3月から陸軍航空隊第6航空軍隷下の司令部が置かれていたのは薩摩半島・知覧である。現在は茶畑に囲まれた場所だが、なでしこ隊に見送られた戦闘機は猿山手前で大きく旋回し、開聞岳目掛けて飛び立ったそうだ。また、松林の中には飛行機を守る掩体壕や三角兵舎が少し離れた場所にあり、出撃まで数日間過ごしたそうだ。

② 平和のために私ができること

離陸2時間前の兵士の笑顔が何を示しているかが重要だ。国のため家族のためという信念か、仲間の後を追ったのか、死後の魂を信じていたのか、生きる者のために死んだのか、米兵を憎んだか、軍令部を恨んだか。兵士に依ろうが、感情を理性で捉えることはできない。達筆からは窺い知れない。戦争が長期化した以上、民間人の被害も考えざるを得ない。先人等は土地や主権のみならず文化や環境を守ってきたのではなく、創ってきたのだと思う。時代変化の中、何を残すか。国家制度や経済至上主義的な部分はどうか。基盤として生きてきた人が余りに多いので、変え難いことだと思う。私は、主観は一定ではないが、脳を含めた身体と一体であり、時間と共に成り立っていると考える。十分な認知能力をもつ以上、その認知傾向は変わろうが、主観をできる限り維持することを目指すべきだと思う。数年後に誕生する命は未定であり、生まれたての赤ん坊は無思想である。私は歴史や文化はそれを捉える生命的な主観が前提であるという立場で、出生数による人為的な人口調整をする形でも、今生きている人への必要な供給を満たすべきだと思う。ここまでは私の思想であるが、限られた価値観に流されないためにも、一時代的な社会的重要性や集団価値を疑って冷静に考え直すのは皆にできることだと思う。他者が脅威になるようなことをするという勝手な想像を皆がやめるべきである。

未来へ

松本深志高校 2 年
望月 美里

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は今回、この現地学習を通して、戦争の記憶、特に特攻についての記憶の継承の難しさを強く感じました。

今回の学習では、特攻についての見学が中心でした。その中でも、特に万世特攻平和祈念館の展示が印象に残っています。

この祈念館では、特攻で亡くなった方々の遺影や遺品、遺書、血書などが展示されており、それぞれが心に直接、様々なことを訴えかけてくるようでした。

その中で、本来遺影が展示されているはずの場所に、「遺影の情報を募集しています」という淡々とした文字がありました。

その文字が、私には一際目立っているように感じました。

私は、遺影がない方は、生前どのような人だったのか、普段はどのような表情をしていたのか、特攻に向かう前にどんな気持ちや表情をしていたのかを想像することの難しさを痛感したのと同時に、記憶が継承されなくなってしまうたら、その当時の状況を回想すること自体が難しくなるという恐怖を覚えました。

戦争を実際に体験した人は年々減っています。今後、どのようにして次の世代に戦争の記憶を継承していくかが、大きな課題となっています。特に特攻についての記憶を継承できる人は限られており、年齢的にも活動が難しくなっています。

特攻はもちろん、戦争そのものも防がなければならないものであり、当然のこととして絶対に繰り返してはいけません。しかし、記憶の継承が途絶えてしまえば、戦争について学ぶきっかけが減ってしまい、真の戦争の悲惨さを理解することが難しくなってしまうのではないのでしょうか。これによって、悲惨な歴史を再び繰り返してしまうかもしれません。そのため、戦争で亡くなった人々のことを忘れず、私たちは常に戦争の記憶をどのように次の世代に伝えていくかを考え続けることが大切なのではないのでしょうか。

② 平和のために私ができること

「平和な世界」とは何でしょうか。

人によって、時代によって、求める「平和」の形は様々です。

例えば戦時中、平和な日というのは、「爆弾が落ちてこない日」だったかもしれませんが。しかし、現代の日本を生きる私達は、「爆弾が落ちてこない日」が当たり前であって、それを特別に平和だとは感じません。

今思う「平和な世界」を実現したとしても、その実現した世界を私達は「当たり前」と思うようになるでしょう。

また、平和を脅かすものは、何も戦争ばかりではありません。

殺人や交通事故、自然災害。株価の暴落ですら、平穏な生活を脅かす脅威となりえます。

これらを防ぎ、その全てに備えるのはほぼ不可能ではないでしょうか。

しかし、私達人間は、複雑な思考ができます。他人の記憶を記録し、共有することができます。他人の置かれた状況に思いを馳せることができます。

平和には終着点がないかもしれません。

だからこそ、今ある平和を脅かすような問題を克服するためにどうすれば良いか考え続けることこそが、より平和な世界を実現するために必要なのではないのでしょうか。

現地学習での学び

松本美須々ヶ丘高校 2 年
二木 怜弥

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私がこの 3 日間の学習で一番心に残ったことは、グループワークをしたことです。

私はそのことで新しい気づきが多くありました。史料館で見た遺書には皆国のために死ぬことがうれしいと書いてありましたが、最初私にはその気持ちがよく分かりませんでした。生き残った特攻隊員の話も聞いて、選ばれたことをうれしがったり、逆に選ばれなかったことで悔し泣きするというところにすごく驚きました。

しかし、発表者のうちの一人の意見を聞いて考えが変わりました。彼らは兵士だったので少しは死ぬ覚悟もできていたと思うし、今私たちがそんなことを言えるのは、その作戦の結果を知っているからであり、さらに特攻を非難すると言うことは、特攻隊員のことを非難することになるのではないかと、そして彼らは絶望的な戦況の中で必死に戦い大切な人や国の未来を守ろうとしていたという意見でした。自分は改めていろいろな視点から歴史を見ることの大切さを学びました。必ずしも今見ている視点が全てなのではなく、当時の人々がそれについてどう思っていたのかを考えることが大切なんだと思いました。

そして自分はこのような体験をまだ 17 という年齢でできたことや、そのようなことを話し合うことができて本当に良かったと思いました。他にもたくさんの方の講演を聴き、特攻についての新しい知識や、隊員の心情を聞いて考えることができたととても大きな経験となりました。

私はこの 3 日間で滅多にできないような経験をし、学んだことを生かして過去に起こった出来事を繰り返す事が無いようにしなければいけないと思いました。

② 平和のために私ができること

私はこれまでの体験で、平和のために今世界ではどのようなことが起きているのかをいろいろな視点から見て自分なりの意見を持つことが大切だと思いました。今世界で起きている紛争がなぜ起きてしまっているのかを知っていくなかでより具体的な平和な世界になるための考えが出てくると思います。そのために日頃からいろいろなメディアから情報を集めて自分の考えに役立てられれば、と思います。そして現地学習で学んだことをもう一度振り返って誰かに話すことができれば平和な世界に 1 歩近づくと思います。私は特攻や平和について学んだうちの 1 人としてその経験を生かせればいいと思います。

「生きること」を問う

松本県ヶ丘高校2年
前村 陽太郎

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私が現地学習で最も印象に残っているのは、“特攻の母”こと鳥濱トメさんの言葉です。トメさんは富屋食堂の店主で、当時は飛行場に近かったことから軍の指定食堂となっていました。現在は「ホタル館」という資料館として当時の建物が再現されています。富屋食堂は、特攻隊員の最期の願いを叶える安らぎの場でした。トメさんは私財を投じて隊員に食べたいものを食べさせたり、遺書を家族のもとへ届けたりしていました。まさに、日本で最も近く特攻隊員の最期に寄り添った女性といえます。

中でも心に残ったのは、彼女の言葉「なぜ生きのこったのか考えなさい」です。この言葉はわずかに生き残った特攻隊員に向けたものであり、同時に今を生きる私たちにも問いかけているように感じました。私たちも「自分はなぜ生きているのか」と考えることがあります。当時と今では“生きる”という意味がまったく異なることに気が付きました。特攻隊員にとって「生き残る」ことは不名誉なことでした。しかしトメさんはそれを否定せず、むしろ生きる意味を問いかけたのです。特攻への参加は表向きには志願制でしたが、実際には断れない雰囲気の中で多くの人が“志願”させられていました。行けと言われて行った彼らが「なぜ生き残ったか」を考えるのは、どれほど苦しいことだったでしょう。

一方で、現代の私たちは自らの意思で進路や生き方を選ぶことができます。自分が何者であり、どう社会に貢献できるのかを考えることが「なぜ生きているのか」を考えることにつながるのだと思います。生きることの意味を真剣に考えた人々がいたからこそ、今の私たちは自由に生き方を選べる。そのことへの感謝を忘れずにいたいと感じました。

② 平和のために私ができること

平和のために私ができることは、戦争の悲惨さと平和の尊さを発信することです。私は中学三年生のとき、広島での平和学習で初めて戦争体験者の言葉に触れました。語り部の高齢化が進む今、戦争体験の継承は私たち若い世代に託されています。

現在、私は高校の探究活動で、満蒙開拓団を題材にドキュメンタリー番組を制作しています。戦争を自分事として考え、当時の様子を“リアルに”伝えるために映像という手段を選びました。

SNSで誰もが気軽に情報を発信できる今、戦争や平和について学んだ中高生には「発信者」になってほしいです。私も一人の発信者として、研修で得た学びをもとに精力的に活動していきます。

鹿児島を訪れた感想

信濃むつみ高校2年
リベラカルナーラトゥヌ 海渡

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私が現地学習で印象に残った事のひとは年齢が若い事でした。当時の特攻隊員の最年少は17才で最年長でも32才で、両親や兄弟、家族があり、一度きりの人生でまだまだ生きていたいことも成し遂げたいこともあったとは思いますがそれでも様々な理由で飛び立って行かれたのが胸に来るものがありました。私自身に3年生の可愛い妹が居ますが仮に当時17才で生きていたら当時の人のように覚悟を決めて特攻に行く事はできなかったと思います。

次にバスで回りを巡って戦争の全体像のごく一部ではありますが分かりました。半地下で隠れた三角兵舎では特攻隊員・擁護部隊員の皆様へ向けて知覧高等女学校の方たちが食事の準備や洗濯と言った身のお世話をし、マスコットを作って出撃前に渡して送り出し、特攻隊員の方々は別れの手紙を書いて心の整理を行っていたり、三角兵舎の近くで掩体壕を作りカモフラージュをしたり爆風から機体を守り、その中のお話で実は米軍に衛星から映っていてある意味で言えば米軍の気まぐれで壊されなかったエピソードは唖然としました。弾薬庫には当時機関銃を受けた後があり残っていることに驚きました。他に給水場、防火水槽、通信室など兵士の為の兵站を整えて軍事作戦の成功を少しでも上げる努力をしていた視点は今まで考えたこともなかったので斬新でした。

最期に特攻隊員の手紙の内容です。教科書や授業では『特攻隊員は嫌々ながら行かされた』と今回の学習をするまで思っていました。ですが沢山の遺言の手紙を読んで、勿論半強制的に行かされた側面もありますが、様々な理由があることが分かりました。例えば『国体護持を堅持する為』、『家族を守る為』、『この国の将来を守る為』など知らないことばかりでした。特に印象に残っている手紙がふたつあります。ひとつは万世特攻平和祈念館にあった『今田義基』さんの弟さんに向けた手紙です。そのなかの一部に『大東亜戦争を生き抜いたからといって、国恩の万分の一にもこたえることは出来ない。』と戦後自身が生きてこの国を復興する必要性を理解しつつそれでは国家的観念から言えば万分の一にも役には立てないと思い、『皇恩の万分の一にも答える事が出来れば、兄としてこれだけの幸福はない』と書き残し本当は生きる道もあった上でそれでも尚も特攻隊員として行かれたのが印象に残りました。

ふたつめは私と同じ安曇野市に住んでいた『上原良治』さんが当時の全体主義的であった日本は負けると分かった上で自由主義者として特攻に行かれたことに驚きました。『俺が戦争で死ぬのは愛する人たちのため、戦死しても天国へ行くから、靖国神社には行かないよ』話したそうで胸に来るものがありました。

② 平和のために私ができること

戦争は時に人の欲望や恐怖から生まれると思います。人が人である限り、争いを完全になくすことは難しいかもしれませんが、

戦争の頻度や規模を減らす努力はできるはずだと思います。

個人が出来る事には限りがありますが、私はまず身の回りの人を大切にし、支え合う形で平和に貢献したいと思います。これまで続けてきた献血を継続し、今年からは毎月の給料の一割を目安に募金を始めたいと考えています（まずは1年間を目標に）。平和のために大切なのは、ひとり一人がその尊さを理解し、無理のない範囲で自分にできることを考え、小さな行動を積み重ねていくことだと思います。今回の学習で感じたことを胸に刻み、これからの人生の中で実践していきたいです。

無題

松本美須々ヶ丘高校 2 年
竹内 大将

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私が現地学習で特に印象に残ったことは3つあります。

一つ目は特攻隊に任命された後すぐに父親に手紙を送ってなんとか最後にあいたいと伝え、父親も手紙をもらってすぐに会いに行こうとしたが、父親が到着した時間が特攻隊員の出撃時刻だったということがあったそうです。その話を講師の方から拝聴したときに私は、父親から見たこの出来事と特攻隊員から見たこの出来事は同じ出来事でもまた違った見え方があるのではないかと思います。

更に妹への手紙を書いている特攻隊員の遺書も目に留まりました。

何もない人からしたらただの家族への遺書でしかないのですが、妹がいる私にはどうしても記憶から離れないものになりました。

この点から同じ特攻という出来事でも立場や状況によって当時の人々は様々な感じ方をしていたのだと思います。

二つ目は教科書では特攻隊員は皆半ば強制的に特攻隊に志願させられた。と書いてありましたが実際に遺書を見たり話を聞いてみると隊員は一人一人違った考え方を持っていて驚きました。

特攻には行きたくなくて夜にひっそりと泣いてた人、本当に国のためと思い飛びたった人、家族のことをひたすら思っていた人、様々です。

その中で特に目を引いたのが地元の長野県安曇野市出身の上原良司さんの遺書です。その遺書には他の隊員と違い日本が負け、自由主義のアメリカ・イギリスが勝つとはっきり書いてあったのです。それを見た時の感想は当時の検閲をよく潜り抜けたなど当時にも現代社会に通ずるような考え方を持っていた人が日本にもいたんだ。です。このことから教科書や動画を見ているだけではわからない現地の生々しい当時の風景がフラッシュバックしました。

三つ目は万世や知覧ののどかさです。

特に知覧は一面畑でとても長閑な地域でした。その長閑さと特攻がいまいち結び付かず違和感を覚えたのが印象的でした。

ガイドの方の80年前はここが飛行場だったという説明を受けた際にもこんなに綺麗な場所なのに…という感想が一番に浮かびました。

戦争から80年も経っているので当時の面影もなく変化しています。

でも当時の状況もこれからの世代に語り継いでいくことが大切だと思います。

② 平和のために私ができること

私は行動を起こさなくとも一人一人が平和について考えるということが増えれば平和に大きく近づくと思います。1人で100頑張るよりも一万人で1頑張った方が圧倒的に前進します。そのため今回平和学習に参加した私が率先して平和に対して深く考えたり、友人と意見を共有し合ったりすることで少しでも平和に対して関心のある人を増やしていきたいと思います。そうすることによって私の周りから少しずつ平和に対して関心のある人が増えていき、その人の周りでも同じようなことが起こるようになっていき…このようにして特に若い世代を中心として平和に関心を持ち後の世代に繋げていきたいと思います。

特攻の歴史と向き合って

松本県ケ丘高校2年
藤岡 絢香

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は、今年の夏に松本市広島平和記念式典等参加事業で広島を訪れました。私は平和について学ぶ機会として参加しました。この事業で私は初めて戦争の歴史と真正面から向き合うことが出来ました。その中で訪れた呉の海軍兵学校では、旧日本海軍の特攻作戦で亡くなった方々の写真や遺書、当時使われていた物などが展示されていました。写真に写る若い兵士たちの表情や遺書を見た時に初めて戦争が遠い過去の出来事ではなく、そこに生きていた一人一人がある現在へ繋がるものだと強く感じました。

この体験があったからこそ、私はもっと深く特攻について知りたいと思い、鹿児島へ行くこの事業に参加することを決めました。

平和学習で訪れた万世特攻平和祈念会館や、知覧特攻平和会館では、呉の海軍兵学校で見た時と同じように写真と遺書、そして身につけていた品々など、様々な遺されたものが展示されていました。一つ一つの展示を見ていく中で、特攻で命を落とした人たちが、私と同じように家族がいて、日常がある存在だったのだということを改めて実感しました。

特に印象に残ったのは遺書です。遺書を読んでいると、特攻で亡くなってしまった方々の文字や文章の内容が、私と同年代の方でも、私よりもはるかにきちんとしていたと感じました。明日死ぬと知っていながら、なぜあのように丁寧な文字で理路整然とした文章を書くことができたのか、不思議でなりませんでした。

鹿児島から帰る時、飛行機に乗りました。滑走路を走り、空へと飛び立つ瞬間、ふと特攻で亡くなってしまった方々のことを思い出しました。私も同じように空へと飛んで行きます。しかし、その行き先は全く違います。私は家へ帰るために飛行機に乗りました。一方で、彼らは二度と帰ることが出来ない決死の作戦のために飛行機に乗ったのです。

行きに初めて飛行機に乗った時は、非日常的な体験だったことで興奮していました。しかし、帰りの飛行機ではその気持ちはなく、少し気分が落ち込んでしまいました。同じ飛ぶという行為でもその目的が全く違うことを考えると、今自分が当たり前のように享受している平和や日常の尊さを強く感じました。

② 平和のために私ができること

広島へ原爆について学びに行ったときも、今回のこの鹿児島へ特攻を学びに行ったときも、私は平和とは何かという問いに、はっきりとした答えを出すことができませんでした。

それでも、今を生きている私たちが大きな不安を抱くことがなく、家族や友人と過ごし、学校に通い、くだらないことで笑ったり、泣いたりすることができるこの状態こそが、私たちの周りの世界が平和であるという証左なのだと思います。このような何気ない毎日が当たり前のように続いていることは当然のことではありません。特攻で亡くなった方々を含め、過去に生きた人たちの犠牲や、栄光によって今のなんてことのない日常が成り立っているのだと感じました。

だからこそ、そういった方々への感謝と過去に何をしたのか、何があったのかを忘れられないようにしていくことが平和のためにできることではないかと思いました。

託されたものから学んだこと

松本県ヶ丘高校 2 年
飯島 慎一

① 現地学習で特に印象に残ったこと

戦争で”特攻”(特別攻撃)が行われていたことを初めて知った。特攻は特攻兵だけで戦線に行くと思っていたから、先行機や斥候など色んな兵器が特攻を成功させるために、いたこと。特攻兵がいたから、そうやって自分の命を賭して日本を守ってくれた人がいてくれたこと。兵隊さんだけでなく、整備兵や通信兵、なでしこ隊など様々な人が年齢問わずチーム一丸となって協力していた。深く関わっていくうちに情が湧いてきて行く側も送る側もえもいえない気持ちだっただろうなと写真やトメさん、生き残った人のインタビューから感じた。

特攻兵の遺書を読んでいるとどれも誰もが家族や好きな人、先生など自分を支えてくれた人のために書いていることがわかった。字の筆圧などからこちら側に訴えてくるものがあつた。覚悟、安心、感謝…。とてつもない過酷な環境で過ごしていてそんな中で成果を上げろと言われても鬼畜どころの騒ぎではない。それではただただ犬死にしてみうだけだ。日本国民から回収した物資を軍が使うのだからもっと兵隊の精力は良いものであるはずなのに…。どの人も私と同じ、もしくはそれほど歳の大した差がない人たちばかりで、当時その歳で私が家族など大切な人のために死ぬるか言われれば死ねない…と思った。血書や手紙を書く三角兵舎に泊まるなど様々な段階があつて、覚悟を何度も決める瞬間があつてとても苦しかった。検閲があり、全く書きたいことを書かせてくれない、書いても上で破り捨てるなど家族に伝わらないと思っていたが、駐屯地や何時に出発などが消されていて意外にも検閲は厳しくないと感じた。情けないことを書くな！なんて言われそうだが人は他人のためには想像以上の力を発揮できるから、上司がそれを許したのかと感じた。または上司も人間で「最後だし、それくらいは許してやろう」的な人情だったのかな…。本当に戦争は誰も幸せにならない、改めて強く感じた。会いたいときに会えない、話したいけど話せない、やりたいことがあつてもできない、そんなときがあつたこと。

「当たり前は当たり前ではない」何気ない日常を過ごせていることがとてつもなく素晴らしいこと。

② 平和のために私ができること

戦後 80 年ということで、戦争の時代を生き抜いた・覚えている人達は 85 歳以上であり、10 年経てばもう記憶にある人はいなくなってしまう。そうすると日本は戦争を知らない人だけになってしまう。ただただ「戦争はいけない、やってはいけない。」そう思うのではなく、色んな立場・角度・視点から見る。相手の立場に立つだけではなく、その人の気持ち、その人になりきって考えること。戦争の悲劇を忘れないように、風化させないようにするために 1 人 1 人が戦争を遠ざけずにしっかりと向き合うことが大切。ちゃんと「自分の目」で見て現地を訪れてそこで考え、自分に問い、自分の意見を確かに持つこと、そして、考えて考えて考えて考え続けること、後世へ伝えていくことが大事だと思った。

戦争と精神

松本工業高校 3 年
前澤 洋太郎

① 現地学習で特に印象に残ったこと

第二次世界大戦末期、日本では特攻が行われた。特攻は若者たちが命を捧げて敵艦に突入するという、決死の行為である。その多くは 20 歳前後の青年で最年少は 17 歳、最高齢でも 32 歳であった。彼らは両親や、兄弟を残して出撃し、その際に遺書を残していった。その遺書には両親、兄弟、近隣の人や友人など、数多くの人へ言葉を残した。それを読み解き、色んなことを学ぶ中で 1 番印象に残ったことは、日本の強さの本質である。

私はこの現地学習を通して、日本の強さの本質は精神や魂というものが関与していると思う。私は特攻兵の最年少は 17 歳であると聞いた時、自分だったらどうだろうと考えた。遺書の中には自分を言い聞かせている物も多くあったが、いくら国を、家族を守るためとはいえ、自分を言い聞かせられるだろうか？と疑問を持った。

その疑問を持ち、遺書を読むと「私はいつも見ています」とかホタルなど「〇〇になって帰ってまいります」などの文言があった。

このことから、今ではあまり馴染みの無い考え方だが、魂として帰って来れるという考えがあったのではないだろうか。もちろん必死の作戦であるから必ず死ぬのは確かであり、怖いものであるが、今よりは肉体の死が怖くなかったのかもしれないと考えた。

その考え方もすごく印象に残ったが、もう 1 つ印象に残ったことがある。それは宗教じみている程の愛国心である。

家族、兄弟、そして国を守るためとはいえ特攻というのは異常な行為に、沢山の志願兵が集まり、それを応援している国全体の雰囲気こそが本当はあってはならないものだと感じた。

この 2 つの精神や考え方が戦争を裏から支えていたものだと考え、強く印象に残った。

② 平和のために私ができること

私は、鹿児島県での現地学習を行う前は戦争は過去のもの、遠い国のものだと思っていた。しかし、現実とは違った。同い年の子が兵士として戦い、その中には必死であるのに覚悟を決めて特攻に挑んでいる。その現実を今回正面から受け止め、遠い国のものでも、過去のものでも無い事を理解した。きっとほとんどの高校生がどこか他人事だと思う。その現実を少しでも多く発言、発信をして、何があったのかを他の高校生やそれよりも若い人たちに認知してもらい、戦争が起こらないよう、反対意識を持って欲しいと思う。また、来年から選挙権を持つので、もし戦争をするべきと言う発言が出てきてもその人が当選しないように選挙に参加するため、政治の世界にもアンテナを高くして参加して行きたいと思う。

現地に行ったからこそ学べたこと

立命館大学4年
花村 美海

① 現地学習で特に印象に残ったこと

2点ある。1点目は、知らないことや見えていないことが多くあったことだ。特攻は、実際に空を飛んだ特攻隊員だけで完結するものではなく、その出撃を可能にした様々な人々の存在によって成立していた。飛行機の整備を担った整備兵、情報を伝えた通信兵、そして彼らの生活を支え、別れを見送ったなでしこ隊などの女性たちの支え。彼ら1人ひとりの献身的な努力と、言葉にならない複雑な想いがあったことを知った。これまでメディアなどで触れる機会の多かった特攻兵の英雄的な側面だけでなく、「見えていない」多くの支えがあった事実を目に向け、歴史を多角的な視点で捉え直す必要性を痛感した。2点目は、特攻隊員が残した遺書である。知識不足から崩し字などで判読できない部分が多い中で、私はその筆跡に込められた感情を読み取った。遺書の中には、書き出しは決意に満ちた勇ましい、しっかりとした筆跡であるにもかかわらず、文末に近づくにつれて文字が細く、かすれていくように変化しているものがあった。これは、書いているうちに、家族や友人との別れという自身の死の実感が迫り、涙ながらにペンを走らせたのではないかという、隊員の内面に秘められた悔しさや悲しさを想像させた。

② 平和のために私ができること

2点ある。1点目は、戦争を、そして特攻を風化させないということだ。今回現地で学んだこと、見たこと、考えたことはもちろん、戦後80年とは言え、まだまだご存命の方はいらっしゃる。だからこそ、その方々の口から当時のことをお聞きし、それを私自身の周りにいる家族や友人に話をすることで戦争や特攻を風化させないことが私のやるべきことであると思う。2点目は、いつでもどんな時でも、自身の意見を持ち、それを言えるようにしたいと考える。現地学習の中で「洗脳」という言葉が多々出てきた。洗脳は、教育や時代背景の中でされることもあるだろうが、普通に生きていたとしても知らぬ間にされていることもあると思う。現に私も何かしらの洗脳をされていてもおかしくないと思う。しかしその中でも常にその「当たり前」や「普通だと思っていること」や「常識」を疑い、常にどんな物事に対しても自身の意見を持つべきであると思う。そして、意見を持つだけではなく、その意見をきちんと述べられる人になりたいと思う。

考えて、考えて、考え続ける

信州大学 4 年
小林 泰智

① 現地学習で特に印象に残ったこと

「実際に足を運び、見て体感したことを自分で考えることの重要性」を強く実感した。現地を歩き、展示を目の当たりにしたことで、これまで教科書から得ていた知識とは異なる多くの気づきを得た。学校教育の中で「特攻」という言葉を学んできたものの、実際にどのような作戦であったのか深く理解してはいなかった。現地で知ったのは、特攻とは航空機で敵艦に突っ込む行為だけではなく、水上や水中などさまざまな形で行われていたということだった。その背後には、命を懸けて祖国を守ろうとした人々の強い覚悟があった。また、特攻兵だけに目を向けてはいけないことも強く感じた。前線で命を懸けたのは彼らだけではなく、飛行兵や整備兵、通信兵など、多くの仲間がいた。そして彼らを支え続けた「なでしこ隊」や家族の存在があったことを痛感した。誰か一人の犠牲だけで成り立ったものではなく、無数の人々の努力と祈りがそこにあった。さらに印象的だったのは、展示室に残されていた当時の遺書や写真、そして手紙の数々である。私と同年齢の方々が、死を目前にしても家族や友人への感謝の言葉を綴っていた。その姿に、国を想う気持ちと同時に、人間としての温かさや優しさを強く感じた。今の私がそのような状況に立たされた時に、そのような行動ができるだろうか。

教科書に載っている歴史は確かに大切な基礎知識である。しかし、それがすべてではない。現地に立ち、当時の空気を感じ、そこに残された一つ一つの資料や言葉に触れることで初めて、自分の中での「歴史」というものが生まれるのだと思った。過去をただ「知る」だけでなく、「感じ、考える」ことこそが、次の時代へ平和をつなぐ第一歩であると強く感じた。

② 平和のために私ができること

特攻兵たちの心情を完全に理解することは私にはできない。しかし、「理解できないからこそ、考え続けること」が大切だと感じた。今の平和な時代に生きる私たちが、戦争や平和について考えることをやめてしまえば、過去の悲劇は風化してしまう。戦争を経験した人々が少なくなる今、私たちは「悲しむ」だけでなく、彼らが遺した手紙や遺品から伝わる想いを受け継ぎ、次の世代へ伝えていかなければならない。

私は大学で医療を学び、来年から医療者として働く立場になる。命を扱う職業に就く者として、今回の経験は「命の尊さ」について深く考える機会となった。誰かの犠牲や努力の上に今の平和があることを忘れず、日々の関わりの中で一人ひとりの命と真摯に向き合うこと…。それが私にできる、平和への小さな実践だと思う。

戦争から考える 80 年

松本秀峰中等教育学校 4 年
星野 愛里

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回感じたことは情報の大切さです。ラジオで聞くより映像で見るより、自分の足で現地に立って同時に人の目線に立って考えることが大事だと思いました。そう感じた主な理由はメディアへの不信です。今回、知覧特攻記念館に行ったときガイドさんの説明で、飛行兵と特攻兵が編隊を組んで特攻に向かったことを知りました。戦争の小説や映画等を予習していったにも関わらず、特攻兵のみで特攻に行ったと思い込んでいたのです。また一部の映画などでは隼や九十九式のことを零戦とよんでいましたが、これは戦後にアメリカ軍のゼロファイターという言葉が逆輸入されたもので、当時の人達は使わなかったというのも驚きでした。さらに驚いたのは燃料についてです。メディアはよく特攻は命も燃料も片道切符だと言いますが、実際は爆弾の威力を上げる油として撒くために二往復半の燃料を積んでいたと知りました。戦争系のテレビなどでは「燃料も命も片道切符」という言葉を本当によく聞きます。これが誤りだと知って唖然としました。また、私は本とテレビ以外でネットでも情報を調べましたが、サイトによって記述が大きく食い違っており、情報の不確実性を感じました。今回の旅で、今まで絶対だと思っていたメディアは時に間違えることもあると知りました。これからは何事も素直に信じるのではなく、多角的な観点から考える必要があると思います。現地で自分の目で確かめることの大切さを忘れず、平和や歴史についてこれからも考え続けたいです。

② 平和のために私ができること

私は今回メディアが伝える情報の不確実性に驚愕しました。そこで疑うことを忘れては行けないと強く感じました。そして疑うだけでなく自分の足で現地に行き、自分の頭で考え、自分で口に出して伝えること、他の情報に流されすぎない自分の意志を持つことが重要だと思いました。今ある平和は戦時中の人々の努力や犠牲の上に成り立っていることなのに私たちは今を生きる私たちは、戦争を忘れ始めています。今回の旅で戦争の残酷さに触れ、憲法九条を、改正しようとする動きがどれだけ恐ろしいものだったかを知りました。私たちは今ある平和に感謝し次の八十年も平和な日本にするために戦争について考え続ける必要があります。知ること伝えることを怠らないことが私が平和を守るためにできることだと思いました。

松本市から平和学習会

信州大学 1 年
星野 航河

① 現地学習で特に印象に残ったこと

僕が今回の平和学習会で 1 番印象に残ったことは特攻に出た人たちの年齢が想像よりもだいぶ若いということでした。特攻は比較的若い人たちが出ていたと聞いていたのですが実際に平和会館に行き特攻された方の年齢を見てみるとほとんどが 20 代前半の方たちで中には 10 代前半の人などもいて大変驚きました。特攻された方の中で最年少は 17 歳で自分よりも若い年齢の方が 80 年前実際に飛行機を操縦して特攻にとびだったことを想像すると何とも形容しがたい複雑な気持ちになりました。平和会館の展示で出撃前の写真を見ましたが、全員数時間後には出撃して死に行く人たちがあんなにもきれいな笑顔をしているということに相当な覚悟と意思を経て臨んでいたということがわかり、もし自分がその立場だったら同じような笑顔ができるのかを考えてしまいました。出撃前の夜に気がおかしくなってしまうたり出撃のあと自分の故郷の方角へ飛んで行ってしまい自爆されてしまったりする方もいたとガイドの方もおっしゃっていましたが特攻に飛び立った人たちの年齢や精神状態を想像してもそのようなことになってもまったくおかしくはないし逆に錯乱などをしない人たちの精神の強さは祖国を守るという思いから来る強い芯があったからこそだと思えました。普段自分が当たり前のように日々を暮らせているのは特攻やほかの戦いで多くの人が将来の日本のために命をなげうって戦ってくれたからだ実感でき、このことを忘れずに日々の暮らしを大切にしようと思えました。

② 平和のために私ができること

僕は将来教師になりたいと思っています。なので、今回の平和学習会で学んだことを一つとして、これからも戦争に対する学習を怠らずに勉強を続け、教師になったときに正しい知識をもって子どもたちに過去に日本で起きた戦争について教え、次世代に知識をつないでいきたいと思います。また、最近子どもたちが戦争の資料館にいつでもすぐに出てきてしまうとバスの添乗員さんが嘆いており、なかなかひどい現状だと思いました。なので、ぼくが教師になったら事前に戦争に対する知識などを学習し興味を持ったうえで資料館などの施設に行きたいと思いました。

無題

信濃むつみ高校 3 年
小金丸 哲

① 現地学習で特に印象に残ったこと

戦跡巡りで様々なことを知った。

特攻兵と飛行兵がいる

特攻兵は爆弾を積んだ飛行機を操縦する兵

飛行兵はそれをサポートする兵

全体で 12 機のチームであった。

プロペラの回転に当たらないように銃撃を行うことが出来た。

特攻兵は 3 年間様々な訓練を経て倍率 50 倍という小さなもんを通った選ばれた若者たちだった。

特攻兵は石碑や遺影などが今も残されているが、その他にも同じように死にに行った人たちがいた。

3 日間でたくさんのことを学び、それを忘れないようにして生きて行かなければならないと感じた。

② 平和のために私ができること

自分がたくさん経験したことを覚えておくことが平和に繋がると思う。その経験から何を学び、自分の人生にどう活かすのかを考えながら生きて行きたいと思う。特攻のことを知り、他の人にも伝えていきながら日本人としてできることをしていきたい。

現地で学ぶ価値

信州大学 2 年
村井 和夢

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回の現地学習で最も印象に残ったのは、現代の価値観では理解しがたい思想や文化が、戦時中には強く根付いていたという事実である。特に「国のために命を捧げることは誇りである」という考えが、多くの若い兵士たちにとって当然のものであったことに深い衝撃を受けた。1, 036 名の特攻兵がその信念を胸に飛び立ったという事実は、時代の価値観の違いを強く実感させるものであった。

また、学習を通じて、これまで自分が持っていた知識の中に誤りがあることにも気づかされた。例えば、特攻機が「片道切符」と呼ばれるほど少ない燃料で出撃していたことや、零戦の正しい読み方が「ゼロセン」ではなく「レイセン」であることなど、教科書や一般的な情報では得られなかった新たな事実を知ることができた。この経験から、通説をそのまま受け入れるのではなく、自ら現地に足を運び、自分の目で確かめる姿勢の重要性を実感した。

さらに、戦況が悪化していたにもかかわらず、当時の報道では「日本が勝っている」という情報が流されていたことにも強い疑問を抱いた。これは、「敗北を認めることは弱さである」という思想が背景にあったからだと考えられる。しかし、正しい情報を国民に伝えることもまた、一つの強さであるのではないかと思った。報道の在り方や、情報の受け取り方について改めて考えるきっかけとなった。

私は現在二十歳だが、当時の特攻兵の多くも同じくらいの年齢であったことを思うと、彼らが家族や大切な人のもとを離れ、国のために飛び立った決断の重さを痛感する。彼らの勇気と覚悟を讃えるとともに、二度と同じ悲劇を繰り返さないよう、平和の大切さを次の世代へ伝えていく責任が自分たちにもあると強く感じた。

② 平和のために私ができること

今回の現地学習を通して、戦争の悲惨さと命の尊さを強く感じた。特攻隊員たちの犠牲や当時の社会の空気を知り、平和は多くの犠牲の上に成り立っていることを実感した。だからこそ、今を生きる私たちが平和を守るために何ができるかを考えることが重要だと思う。

過去から学び、戦争の記憶を風化させずに次世代へ伝えることが、平和を維持する第一歩である。また、日常の中で他者を思いやり、違いを受け入れる姿勢を持つことも大切だ。

さらに、情報を見極め、自分の考えを持つ力を養うことで、現代社会の平和を守ることができる。直接戦争を知らない私たちだからこそ、学びや行動を通して平和を受け継ぎ、未来へつなげていきたい。

特攻隊の歴史から学ぶ命の尊さと平和の継承

信州大学 2 年
田中 里奈

① 現地学習で特に印象に残ったこと

現地学習で特に印象に残ったのは、特攻隊以外にも飛行兵や整備兵など陰ながら支えていた兵士たちがいたこと、そして特攻隊というと航空特攻のイメージが強いが、水上特攻や水中特攻といった海上で戦っていた兵士もいたということである。戦争と聞いて多くの人が想像するのは特攻隊の存在ではないだろうか。しかし、実際にお話を聞くと、特攻隊以外にも様々な兵士が支えていたことが分かった。また、当時飛行兵が子供の憧れの職業で倍率が40～50倍であったことに驚いた。

館内の遺書コーナーにも心を打たれた。筆記体のような字体で詳しい内容は読み取れなかったが、どの遺書からも国のため、家族のために最後まで戦うという強い意志を感じた。出撃の前夜、兵士たちはどんなことを考え、どんな思いで家族に手紙を書いたのかを私たちは考察する必要がある。彼らは少なからず恐怖心があったにもかかわらず、自分の命を投げ打ってまで守りたいものがあったのだろう。その行動は非常に勇ましく、今の時代では到底考えられないものである。しかし、この特攻隊という部隊を決して美化することはできない。日本は敗北が濃厚な戦いの中で、多くの若い命、未来ある若者の人生そのものを奪った。実際、特攻隊が戦果を上げられたのは最初のうちだけで、すぐにアメリカの進んだ技術によって撃墜されていった。政府は日本が劣勢にあったという事実を正直に国民に伝えるべきだったのではないかと感じる。

今回の学習を通して、改めて戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さについて深く考えることができた。戦争は尊い若い多くの命を犠牲にし、多くの代償を残した。戦争は二度と繰り返してはいけない。このことを胸に刻み、この平和をこれから先も守り続けていきたい。

② 平和のために私ができること

今回の体験を次世代に継承することが平和のために私ができることであると考えている。戦争体験者から直接話を聞いたり、実際に現地を訪れたりすることで、若い世代に戦争の悲惨さを伝えることができる。今の平和な暮らしは、命をかけて国や家族を守った先人たちの犠牲の上に成り立っている。私たちは80年間守られてきた平和を未来につなぐ責任があり、それが戦没者への感謝の表れにもなる。今後は戦争映画などをきっかけに若い世代の関心を喚起し、正しい知識を伝える機会を増やすことで、日本全体で平和について考える社会を実現したい。戦争はなぜいけないのかを問い続け、学んだことを行動に移すことが、今を生きる私たちの使命である。

もう８０年、まだ８０年 ～鹿児島で学んだこと～

公務員
藤森 智子

① 現地学習で特に印象に残ったこと

戦後８０年という節目の年に、鹿児島県南さつま市・南九州市を訪れ、実際に戦争遺跡を巡ったり、新聞記者によって撮られた写真や、特攻隊員が家族や恋人に宛てた手紙などを見る機会を得ました。その中でも特に印象に残ったのは、今でも町の至るところに残る戦争遺跡の存在です。

飛行機を収納する「掩体壕」、練習機の潤滑油やグリースなどを保管し、米軍の空襲を受けた際の傷跡が今も残る「油脂庫」、そして飲料水や飛行機を整備する際に使う水を貯めていた「給水塔」などが当時のままの姿で残されており、８０年という長い年月を経てもなお、戦争の時代の空気を感じさせられました。

また、かつて隊員たちの宿舎「三角兵舎」があった場所も訪れました。ガイドの話によると、ここでは知覧高等女学校の女子生徒たちで作られた「なでしこ隊」が、隊員達の身の回りの世話や食事の準備、洗濯、見送りなどを行っていたそうです。そして、それは出撃を待っていること以外は、限られた幸せな時間を過ごしていたという話でした。そのような状況の中、ここで多くの隊員達が出撃の時を待っていたのだと思うと、胸が締めつけられるような感情が襲ってきました。戦争は決して作られた話ではなく、本当にこの国で８０年前に現実として起きていたのだということを強く実感しました。

目の前に残る遺跡や遺品を見ていると、「もう８０年も経ったのか、それともまだ８０年しか経っていないのか」という複雑な思いが湧き上がりました。戦争はこれまで教科書の中の出来事として遠く感じていましたが、現地に立つことで、確かに私たちと同じ「普通の人々の日常生活の上で起きた現実」であったことを強く感じました。

② 平和のために私ができること

戦争の悲惨さや命の尊さをどのように若い世代へ伝えていくかが、今後の課題だと思います。そのためにも、今回のような現地訪問等を通して、戦争について学び、自分が感じたことを発信していくことが大切だと思います。

しかし、まずその前提として、今ある生活のなかで「気づく」ことが大切だと思います。今ある幸せに「気づく」、戦争に繋がるいざこざに「気づく」。そのような姿勢が必要だということを強く実感しました。

今回の平和学習では、実際に現地に足を運ぶことでしか得られない学びがあり、課題に「気づく」ことのきっかけを得ました。今後も、この勉強会で感じたことや学んだことを、家族や友人に伝え、平和の大切さを広めていきたいです。また日常生活での「気づき」を大切にしていきたいです。

鹿児島県の平和学習を通して

自営業
胡桃沢 和矢

① 現地学習で特に印象に残ったこと

始めに訪れた万世特攻平和祈念館では、果てしない未来があるはずだった最年少の若き青年が特攻により命を捧げたエピソードが思い出されます。生まれて初めて飛行機を操る特攻隊員もいたなか、彼らは戦後100年も満たないこの地で天皇陛下と日本の勝利を願い命を賭して戦っていたんだと思うと、勇ましく誇り高き志であると思う反面、その生涯は成人にも満たない青年にすら過酷な運命を背負わせてしまっている惨状に改めて戦争のおそろしさを感じます。同じ人間同士で殺し合い、最後に残るのは戦場に転がる骨と血、そしてあまたの死骸の上に立つ殺戮者に他なりません。展示品に遺された手紙には家族の心配や親しい間柄に向けた思いやりのある言葉ばかりで胸が張り裂けそうな思いでした。特攻隊員たちも死ぬことが辛い訳ありません。明日、ご飯が食べられなくなるかもしれない、隣にいる仲間と言葉を交わすことも、大好きな家族たちを思い出すこともできないかもしれない。おそらく兵士たちの緊張と不安は計り知れないものだったと想像つきます。

また、人生で一度は訪れたいと思っていた知覧特攻平和会館では、多くの人に見送られながらまさに今飛び立つ瞬間をイメージして作られたモニュメントが印象的でした。その中の1人として飛行機の中の特攻隊員を見ると、タイムスリップしたかのように引き込まれ辛さや悲しみはもちろん、いろいろな感情が駆け回りました。本当は行かないでほしい、だけど私たちと過ごした日々をいつまでも忘れないでほしい。隊員たちの友達や家族はきっとこんな風に思いを馳せていたんだろうと感じました。

② 平和のために私ができること

戦争についてより深く様々な視点で考えることが理解を深める一助になると思います。現代を生きる私たちの感覚とは当然違うことだらけなので、こうだと決めつけるのではなく、資料館や戦争に関連する施設を訪れることによってそこで自分が何を感じたのかが一番大切なことではないかと思います。

また選挙に行くことも日本の未来を考える上で必要な行動だと思います。将来戦争をしてしまう原因をつくるような考えを持つ候補者が選ばれる可能性もあるため、政治に興味を持てると良いと思います。とくに若者は選挙に関心がなく、投票率も各世代でワーストという統計もあるようなので一人一人が自ら積極的に今後の日本のあり方に目を向けていけるとベストだと思います。

当たり前の日常の尊さを学んで

公務員
土屋 茜

① 現地学習で特に印象に残ったこと

現地学習で最も印象に残ったのは、特攻隊員たちの遺書を読んだ時のことです。そこに書かれていたのは、遠い昔の話ではなく、私たちと同じように家族や友人を思い、未来を夢見ていた若者たちの言葉でした。今の私たちとほとんど変わらない日本語で綴られた文章を目にしたとき、80年前のこととは思えないほど生々しく、戦争が決して遠い過去の出来事ではないという現実にも恐ろしさを改めて覚えました。

遺書の中にあった「お母さん、ありがとう」という一文を読んだとき、胸が強く締めつけられました。自分もまた家族を思って生きている一人であり、もし自分がその時代に生まれていたらと思うと、心がぐちゃぐちゃになりそうでした。そして自然と「お母さんに手紙を書きたい」と思いました。生きていること、大切な人がそばにいることのありがたさを、今のうちにきちんと伝えたいと感じました。

帰りの飛行機で昼食を食べながら、同じ空を飛ぶことが、かつては命を失う覚悟のもとだったということを思い出し、苦しくなりました。平和な日常の中で当たり前にご飯を食し、笑い合えることが、どれほど貴重で尊いものなのかを改めて実感しました。

また、現地では多くの人の声を直接聞くことができました。語り部の方々や施設の方々には、悲惨な戦争の記憶を次の世代に伝えるため、日々活動されていました。その姿から、戦争体験を風化させないという強い意志を感じました。特攻の歴史は、ただ悲しい出来事として終わらせてはいけないものであり、そこに生きた人々の想いを受け取り、どうすれば平和を守り続けられるかを考えることが、私たちの責任だと思います。

この学習を通して、平和は与えられるものではなく、守り続ける努力の上にあることを学びました。日常の中で「当たり前」を疑い、他者を思いやる心を持ち続けること、それが、次の時代の平和へとつながるのだと思います。

② 平和のために私ができること

今回の研修に参加させていただき、命を懸けて国のために戦った若者たちの思いに触れました。彼らは決して死を望んでいたわけではなく、若者たちが命を懸けて国のために戦った背景には、時代や空気に流されざるを得なかった現実があったことを知り、深く考えさせられました。

平和のために私ができることは、同じ過ちを繰り返さないよう、歴史から学び、命の尊さを忘れずに生きることだと思います。また、周囲と意見が違ってても自分の考えを持ち、対話を通して理解し合う姿勢を大切にすること、小さな行動でも平和につながることを意識していきたいです。

知覧特攻基地を訪れて

公務員
吉越 涼香

① 現地学習で特に印象に残ったこと

実際に特攻基地になっていた知覧の地を訪れて、平和会館で特攻隊員の方々の遺書や遺品などを見学した時のことが強く印象に残っています。

当時、今の私自身より若い年齢の特攻隊員が大切な家族を残し出撃しなければいけなかったという事実を改めて実感しました。

遺書には「お国のために勇んで行って参ります」というような文章が多く見られましたがそれを見て、もし私が当時同じ状況になったとしたら絶対に同じようには言えないなと思いました。

そう思うということは今、平和な世の中で生きているからこそだと強く感じます。

遺書について、検閲がありながらも出撃（必死）後に親族へ送られるものだったため多少本音を書くこともできたそう、というお話を学芸員の方からお聞きしました。

恋人や家族、子供にむけて正直な気持ちを書いている特攻隊員の方々もあり、とても心が締め付けられる思いでした。

また、戦跡めぐりでは当時作られたままの給水塔や油脂庫、弾薬庫などを見学できたのが印象に残っています。特に油脂庫には敵軍の空襲の際に当たった弾痕が残っており当時の悲慘さが目に見えて絶句しました。

グループワークで地域住民のみなさんと交流の際様々な感想が出る中で、現地の女性の方が強く「絶対に戦争はしてはいけない」と仰ってくださいました。

今の世の中ではその思考が当たり前ですが改めて口に出して言われると身が引き締まる思いでした。今の時代を当たり前だと思わず、この先どのようなようにして平和を続けていけるのか考えたいと思いました。

② 平和のために私ができること

今回の平和学習で学んだことやその他過去の戦争についてまずは自分の中で正しく理解し、そのうえで周囲や後世の方に伝えていくことが平和につながると思います。

戦時中の日本の教育や世間の風潮は「お国のために戦えることは誇りなことだ」というもので、その中で育ってきた国民は戦争をすることに疑問や否定的な感情はなかったのかもしれませんが。そう考えるといかに教育の内容や世間の風潮が、国民の意識を左右することに繋がるのかわかります。

そのことから過去のことを正しく知り、どのような点が誤っていたのかをきちんと判断することで同じ過ちを絶対にしてはいけないと強く思えるのではないかと思います。

様々な情報が飛び交う今の時代で、きちんと自分の目を見て考えて情報を取捨選択していくことが結果的に平和に繋がっていくのではないかと私は思います。

鹿児島知覧を訪れた1人の人間として

会社員
松下 龍市

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私が鹿児島知覧での現地学習に参加し、印象的に感じたことは”いま享受している平和な日常は決して当たり前ではない”ということです。

万世・知覧2つの平和会館を訪れ、当時の資料を拝見したり、ガイドさんや語り部の方のお話を聞く中で、17～32歳の若者1,036名が祖国のためにその身を捧げたという実際の歴史に触れました。特攻という悲しい過去があったということは学校でも勉強しましたが、現地でその内容に触れることによって、今までの知識が立体的になっていく感覚があり、その歴史を”追体験した”という方が、言葉のニュアンス的には近いのかもしれません。

私は多くの特攻兵の方が、家族や恋人のために残した手紙・遺書の内容に焦点を当て、現地見学の時間を過ごしました。特に印象的であったのは、穴澤利夫さんという方が恋人へ宛てた手紙です。穴澤さんは戦況が苦しくなった大東亜戦争末期に、中央大学を繰り上げで卒業をし、学徒出陣として知覧から沖縄の戦地へと飛び立ちました。私も私立大学を卒業したという経緯があったため、そこには共感の念を感じざるを得ませんでした。穴澤さんの遺した言葉の端々には「もう一度会いたい」「話したい」など、いま平和な日本に生きている私にとっては当たり前の日常を、もう1度享受することへの切実な願いが感じられました。他の特攻兵の遺書の中には、家族への感謝や特攻隊に選ばれたことへの喜びが多かったからこそ、一見すると弱々しくも取れるこの言葉は、よりリアルな実感を伴って私の目に映ったのだと思います。

私がいま享受しているこの平和な日本や当たり前の日常は、彼らの純粋な願いや祈りの延長線上にあるものであることを忘れず、それらに感謝をして、これからも平和な日本を続けていく一旦を担うという使命感を持って生きていきたいです。

② 平和のために私ができること

私が平和のためにできることは、今回知覧で体験し、学んだこと・考えたことを自らの言葉をもってして周りの方へ伝えることです。戦争や特攻という歴史について感じることは人それぞれであり、考え方や解釈についても現在と当時では異なるものがあるかもしれませんが、周りへその契機を与えるということは現地へ足を運んだ者だからこそできることなのだと思います。

また、戦後80年ということもあり、その当時の記憶・体験をもっている方は殆どいらいっしょらないのが現状で、その歴史を風化させてしまうことが一番避けなくてはならないことのように感じます。

特攻があったという事実は変えることができませんが、その歴史から目を背けず向き合っていくことや同じことを繰り返さないための努力はできるはずです。

私1人ができることは小さいかもしれませんが、今回、知覧へ足を運んだ1人の若者として、将来の日本の恒久的な平和を願う1人の日本国民として、出来る事に取り組んでいきたいです。

鹿児島平和学習について

会社員
市川 遼太

① 現地学習で特に印象に残ったこと

鹿児島県の万世特攻平和祈念館と知覧特攻平和会館を訪れ、特攻について学ぶ平和学習を行った。これまで教科書などで「特攻」という言葉を目にしたことはあったが、実際に現地で遺品や手紙を見たり、若くして命を落とした人々の写真に向き合ったりすると、その重みと悲しみを強く感じた。

万世特攻平和祈念館では、出撃の前に撮影された子犬を抱えている隊員たちの笑顔の写真が印象に残った。一見すると明るい表情だが、その裏には「死」を覚悟していたことや家族への思いが隠されていたのだと思うと胸が痛んだ。また、遺書の中にあった「母上様、どうかお体を大切に」といった言葉から、彼らが最後まで家族を思いやっていたことが伝わってきた。

知覧特攻平和会館では、特攻機の模型や遺品、映像資料を通して、戦争がどれほど多くの若者の命を奪ったのかを実感した。彼らの多くは十代後半から二十代前半であり、私たちと同じように将来の夢や希望を持っていたはずだ。そうした人たちが国のために命を差し出さなければならなかった時代の異常さを改めて考えさせられた。

この学習を通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを深く感じた。特攻で亡くなった人々の犠牲の上に、今の平和な日本があることを忘れてはならない。これからの時代を生きる私たちは、戦争を二度と起こさないように過去から学び、平和を守る努力を続けていく責任があると思った。

② 平和のために私ができること

特攻について学び、平和は決して当たり前ではないと強く感じた。若い人たちが夢や家族を思いながら命を失っていったことを思うと、胸が痛んだ。今こうして自由に生きられるのは、そうした人たちの犠牲の上にあるのだと思う。私にできることは、まず身近な人を大切にし、相手を思いやることだと感じた。意見が違ってもしっかり話し合いで解決し、争いを生まないようにすることが平和につながると思う。今回の学習で感じた思いを忘れず、これからも平和の大切さを伝えていきたい。

青春 ～一度しかない人生に彩りを～

一般社団法人松本青年会議所
理事長 金井 佑輔

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回、私は鹿児島県を訪れ、戦争の記憶を今に伝えるさまざまな場所で学ぶ機会を得た。そこには、多くの若者たちの想いが静かに息づいていた。

特攻隊として出撃した若者たちは、当時わずか10代後半から30歳前後という年齢だった。私自身が38歳になった今、その若さで命を懸けたという事実、ただ言葉を失った。

彼らは誰かのために、そして「お国のために」という大きな目的のもとに生き、散っていった。その姿から私は、目的に生きることの力強さと、同時に危うさも感じた。

青年会議所という組織もまた、「目的」を掲げて活動する集団だ。

私たちは地域をより良くするため、社会の課題に向き合うために目的を定め、行動している。しかし、戦時中の「目的」と決定的に異なるのは、それが誰かに与えられたものではなく、自らの意思で選び取る目的であるということだ。

人間は古来より、生きるため、豊かになるため、そして幸福を追い求めるために目的を持ってきた。だが、戦争はその「目的」を奪う。

国家の名のもとに与えられた「お国のために」は、個人の自由や主体性を奪い、命さえも手段と化してしまう。

だからこそ、今を生きる私たちは、自らの価値観に基づいた「自分の目的」を持たなければならない。

青年会議所の運動とは、まさにそのための実践だと改めて感じた。

歴史を学ぶということは、過去をなぞることではなく、そこに込められた想いから未来への行動指針を見出すことだ。

鹿児島県で感じた「戦争の悲惨さ」「命の尊さ」「平和の尊さ」は、単なる感情ではなく、これからの私たちの生き方を問うメッセージである。

「目的を生み出し、行動すること」それこそが、今の時代に求められる平和の形だと私は確信している。

② 平和のために私ができること

平和とは、ただ戦争がない状態ではなく、人が自らの意思で目的を持ち、生きることができる社会だと思う。

青年会議所の使命は、そのような「主体的に生きる人」を育て、共に未来を築くことにある。

大きな理想に挑戦する者は、ときに変人と呼ばれる。

誤解され、批判され、孤立することもある。

それでも、何もしなければ現状を肯定していることになる。

だからこそ、私は恐れずに挑戦し続けたい。

進歩のためだけでなく、「目的を生み出すため」に。

それが、今を生きる私たちができる最大の平和への貢献である。

鹿児島での現地学習に参加して

一般参加
長澤 裕子

① 現地学習で特に印象に残ったこと

鹿児島での現地学習で訪れた場所、現地で聞いた話はどれも胸が締め付けられ今後決して忘れることがないであろう体験をした3日間であった。

知覧特攻平和会館に展示されていた遺書や写真を目の前にした時は胸が引き裂かれそうな思いでした。皆それぞれ夢を持った若者が国のために命を犠牲にしなければならなかったことを思うと何とも言えない気持ちになりました。

彼らの遺書からは家族や恋人等大切な人の未来を思う気持ちが滲み出ていて切なかったです。1,036名の壁一面に飾られたお写真はどれも笑顔でそこにまた悲しみを覚えました。笑顔で撮らなければならなかったと現地の方のお話をお聞きし何とも言えない気持ちでした。

三角兵舎も心に残っている。半地下で薄暗くとても狭い場所。固く薄い布団。出撃前のここでの時間を彼らがどのように過ごしたのか、家族・恋人、自分自身が描いていた夢。どのようなことを考え飛び立って行ったのであろうか。想像しただけでも切なくなる場所であった。史跡巡りで訪れた実際の跡地はもとより、特攻平和会館にあった再現施設でさえも80年前の彼らの声が聞こえてくるような場所であった。

バスの中でバスガイドさんがお話してくださった、ホテルになって帰ってくると言った宮川三郎少尉のお話は忘れられない。こんなにも純粋で心がきれいな青年が自分の命を犠牲にし戦ったかと思うと本当にいたたまれない。そして宮川少尉はじめたくさんの特攻兵を見送ってきた鳥濱トメさんの気持ちを考えると本当に切なくなる。

そして今回の現地学習で一番心に残っているのはどこまでも澄んだ鹿児島の青空だ。本当にきれいな空だった。80年前に万世、知覧から飛び立った彼らも同じ空を見ていたのだろうか。夢をもった若者が大切な人を思いこの青空の中に飛び立っていったのかと想像するだけで、きれいな青空でさえも悲しくみえた。

この先空を見るたびに今回の現地学習のことを思い出さずにはいられない。

② 平和のために私ができること

今回この平和学習に参加するまでは大人になってから戦争について学び直しをすることはなかった。どの場面を切り取っても辛く悲しいこの出来事に触れるだけで自分の心がざわつくから敢えて自ら考えようとはしなかった。

今回平和学習に参加し自分の中で何かが変わった。私は戦時中の暮らしを祖父から聞いている。それを子供たちにも伝えていかなければならないと思った。

戦後80年。あの悲惨な出来事からまだ80年しかたっていないのに、平和な時代しか知らない私たちはずっと昔の出来事に感じてしまう。

今平和な時代に暮らせているのは、自らの命を犠牲にして国のために戦ってくださった彼らがいたことを忘れないよう生きていきたい。

特攻隊の死が問いかけるもの

一般参加
霜野 南都美

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回の知覧への平和学習を通して感じたのは、特攻隊の方々は「国家」という宗教のために殉教した人々だったのではないかと、ということです。

実際に特攻隊として任務を遂行した経験のある方のインタビューで、「いつ特攻できるのでしょうか？」と何度も懇願したという話を聞きました。また、エンジントラブルで目的地の沖縄に到着できなかった際も、「死なぬは恥だ」という精神から、どうにかして離島から九州本土まで戻り、再び出撃を願い出た人もいたそうです。ここまで国のために命を差し出せることは、現代の私たちには非常に理解しがたいことだと思います。そして、意見交換の中には、「敗戦を迎えるのであれば、それは無駄な死であった」という意見もありました。

しかし、彼らは既に歴史の一部となり、その死が無駄だったかどうかという問い自体に、もはや意味はないのではないかと私は考えます。そして、彼らの「残したかった日本」が「日本として存在できているのか」と内省すればするほど、恥ずかしさと申し訳なさを感じます。

本当にその死が無駄だったかどうか、その価値を決定するのは、私たちがこれから未来に向けてどのような日本を形作っていくのかというところにかかっているのだと思います。昨今の政治とカネの問題、宗教と政治の関係が議論になること、マスメディアの権力監視の不十分さなどを見ても、日本には解決すべき課題が多いと感じます。

日本をより良くするという使命が今を生きる私たちに課せられているのだと、今回の平和学習で改めて強く感じることができました。

② 平和のために私ができること

平和とは、自分の生活だけの話でしょうか。それとも、自分の住んでいる場所だけのことでしょうか。自分の半径5メートルが平穏であればそれでいい、という気運がこの国にはあるように思えます。しかし、実際には宗教戦争や民族迫害、領土拡大のための戦争が絶えず起こっており、たとえば最近のウクライナとロシアの戦争もその一例です。地球が平和になる日が来るのだろうか、と絶望的な思いに駆られます。

ある人はそれを「民主主義の賞味期限が切れた」と表現しました。本当に恐ろしいことですが、事実として受け止めなければならないのかもしれないかもしれません。

しかし、ただ諦めてしまえば、再びあの恐ろしい過去が蘇ってしまいます。人が人を殺すという愚行を「やむをえないもの」という空気に二度としてはいけません。そのためには、民主主義を実行するリーダーを正しく選び続けることが、平和のために自分ができることではないかと考えました。

わすれてはならないこと。

一般参加
江田 真由美

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回私は、上原良司に会いに行くことを自分の大きな目的としていました。国家の状況を真実の目で見つめ、自由主義を表明することのできた上原良司。彼が出撃前に訪れて、家族に手を振った穂高の乳房川の橋・・・そこから知覧までの道筋を感じることができました。

その一方で、人間的にも学問的にも成熟して悔しくも世を去った上原とは相對するような若い少年の遺書にも心が打ちのめされました。宇佐美輝夫飛行兵はこのような遺書を書いていました。「きょう トランプ占いをしたならばお母さまが一番よくって将来最も幸福な日を送ることができるそうです。輝夫は本当は35歳以上は必ず生きるそうですが、しかし大君の命によって国家安泰の礎として征きます。・・・」この幼き少年はたとえ死ぬことは知っていても、自分の命の長さを、母の幸せを、トランプ占いに懸けてみたのでしょうか。もしかしたら違った未来があるかもしれない、と絶望の中に一縷の光を見たかったのでしょうか。占った瞬間の、その瞬間だけの喜びを思うと言葉になりません。この残酷な作戦において命の価値を見出すことはできませんでした。

人はみな、その立場で一生懸命生きようとしています。宇宙ステーションから見れば、いや、mapで見るだけで国境なんてない。分断なんてない。それは一目瞭然の事です。共感と、話し合いと、優しささえあればそれでよいと思います。

青年会議所の皆々様、このような素晴らしい機会を若者に、そして私達にまで提供してくださり、感謝に堪えません。本当にありがとうございました。

② 平和のために私ができること

「若い世代へ伝えること」は当然であります。しかし今、現実には戦争へ向かう政治を危惧しています。そうさせない政治を選ぶのも、それは選挙権を持つ大人の役割です。では、その大人達は知っているのだろうか。今回友人達に「知覧に行ってくる。」と話しましたが、「それどこ？楽しんできてね。」など言われました。知覧の意味を知らない大人はたくさんいます。だとしたら目の前の「大人」に伝えることも非常に重要と思うのです。それは私の責任でもあります。

松本と鹿児島をつなぐ特攻から考える平和学習に参加して。

一般参加
我妻 華生

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回、万世特攻平和祈念館、知覧特攻平和会館周辺戦跡、知覧特攻平和会館を巡り特攻隊について学んできた。まず、万世飛行場は大戦末期となる1944年（昭和19）年に建設された。飛行場として使用されたのは、わずか4ヶ月間。幻の特攻基地とも呼ばれている。この地から201人の若者が沖縄へ出撃・散華された。万世特攻平和祈念館では万世を『よろずよに』と読み、それに『に』を加えて、千年・万年が平和でありますように。また『よろずよに』碑は万世飛行場から特攻隊員の多くの方が沖縄へ出撃・散華されたので、碑の向きは南の『沖縄』を故郷が見えるようにお顔は『東』を向いていると語り部の方がお話されていた。私は特攻隊について詳しくは知らなかったが、多くの青年が花形とされるパイロットの特攻隊員になりたくて30倍から40倍率の試験を合格する必要があった。合格後、航空学校で1年パイロットになるための教育がされ飛行学校で地上準備教育（グライダーや天候学）を半年、基本操縦教育（アクロバティック操縦等）を4ヶ月、教育飛行隊を6ヶ月、錬成飛行隊で錬成教育を受け特攻隊員になれたと。特攻隊は12名で1グループ。この特攻隊員をお世話していたのが知覧高等女学校の生徒たち『なでしこ隊』。なでしこ隊は特攻隊員の掃除、洗濯、給仕、裁縫（お人形造り等）また出撃を見送る役割を担っていた。また陸軍指定食堂『富屋食堂』の女将は『特攻の母』と呼ばれ、出撃を控えた多くの特攻隊員等の心の支えとなり、食事や心のケアをされていた。なでしこ隊や富屋食堂の女将は、出撃していく特攻隊員をどんな気持ちで見送ったのかと考えるだけで胸が苦しくなる。生き残った特攻隊員の島田 昌往さんのお話では、出撃前夜の過ごし方は、最後の晩は寝ることが勿体無いといろいろ考えて簡単には眠れない。戦友と話したり家族に手紙を書いたりし。次の日に備えて隊長が寝る様にと皆が布団を被り、中には泣いている隊員もいたと。想像するだけで辛く胸が張り裂けそうになる。沖縄に向けて2時間半の長い低空飛行をしないといけないし、戦友のことなど考えず、爆音に負けない声で『お父さん』『お母さん』と叫んでいたと。ただ、島田さんはエンジントラブルが起こり徳之島に不時着し、そのまま終戦を迎えたとお話されていた。死んでいく苦しみ、死にきれなく生き残った苦しみ。お国のために、家族のために、みんなを守るために。戦争で多くの尊い命と財産が失われた過去は取り戻せない。これから平和を守り続ける為に、私達は戦争について学び、深く考え、多くの人に伝えていく必要があると改めて考えられた。

② 平和のために私ができること

平和のために私たちに何ができるだろうか。まず平和とは、仕事や勉強をしたり、運動をしたり、ご飯を食べたりと平穏な日常生活を繰り返し継続できることだと思う。この平穏な日々が過ごせていることが本当に幸せなことだと平和学習を通して実感している。争いのない世界にする為に私達は、対話していくことが不可欠である。なぜなら、相手を知り、理解してお互いに争わなくても済むようにする為にだ。国が違えば価値観や文化も違う。日本人にとって普通なことが他国では普通ではない。感覚や価値観の違いを理解し合うことは非常に難しい。また戦争で起こったことを知り、深く考え多くの人に発信して、皆が同じように戦争はいけない、平和な世界が大切だと共感できるように伝えていくことが平和のために私たちにできることだと思う。

知覧の地に立って

一般参加
安藤 佳織

① 現地学習で特に印象に残ったこと

知覧という地に実際に足を運び、その土地の空気を感じる。今まで映画の中の出来事であったようなことが、自分の身にすうっと入ってくるような、答え合わせのような時間でした。知覧の街には、いたるところに特攻隊や戦争の痕跡があり、思いを馳せるには充分で、三角兵舎、飛行場跡の道路、道に並ぶ灯ろう、弾薬庫や給水塔など、時代を経てもしっかりと現存していることが確認できました。遺跡、遺品、遺書、写真…どれを見ても、想像を超える時代がたったの80年前だったことが信じがたいです。平和を当たり前のものと思い、何の心配もせず今まで生きてこれたことへの感謝がこみ上げます。と同時に、現代の日本の在り方や自身の生き方についても深く考えさせられます。

現地ガイドの方から、特攻隊が際立ってしまうが、護衛、通信、整備などをしていた人たちもいたことを思っただけの話と聞いていました。鳥濱トメさん、なでしこ隊をはじめ、お世話をした人たちや見送った人々、家族…色んな人の背景もまた、資料を見る・聞くことで感じました。先人の方々の延長に今、自分たちが生きていることを理解していたつもりだったのが、本当に心からの実感に変わりました。

現地に行く。これは本当に重要なことだと思います。

一緒に参加した学生の平和学習に対する真摯な姿勢も印象深かったです。一般参加の方の意見で、平和学習に地域によって大きく差があるという言葉にも衝撃を受けました。見聞を広めることは、いくつになってもし続けていきたいと思っています。

鹿児島県のお墓にはお花が沢山でとても華やかでした。時期に決まりなどはなくて、いつも賑やかなのが素敵だなと。その文化は個人的に取り入れていこうと思っています。

② 平和のために私ができること

知覧に行き来して、後悔がおしよせてきました。おじいちゃん、おばあちゃんともっと話をすればよかった、話を聞きたかったなど。おじいちゃんは海軍に志願して17歳で乗船し、敵の攻撃を受けて漂流したが一命をとりとめ、その後感染症にかかり帰国していました。何かが違っていたら、自分も生まれていない。そう思うと今のこの人生は本当に奇跡です。私からすれば当時、怖いおじいちゃんだったので、あまり話をしませんでした。今、また会えるのなら…ゆっくり話を聞きたいです。

この80年、日本では戦争は起きていませんが、それは経験してきた方々が守り抜いてくれたおかげです。これからどうなるのかは分かりませんが、私たちもこれからどういう世の中にしていきたいのか、1人1人が考え続けることが必要だと思います。私は“今”を大事に生きていること。自分の大切な人との今のこの生活に感謝しながら生きていることが、平和につながると 생각합니다。

平和学習を終えて

一般参加
太田 かおり

① 現地学習で特に印象に残ったこと

開聞岳、三角兵舎跡、飛行場跡地、灯籠、富屋食堂。

美しい山、森の湿度、布団の硬さ、飛行場の広さ、空の色、空気。

全てが80年前と陸続きにつながっているこの場所が、あの勇敢な兵隊さんたちが、当時私たちと少しも変わらない人間だったことを体感覚で教えてくれた感じがして、現地に赴くこと以上の学びはないと心から思いました。

死生観や作戦の在り方については、現代の私がどうこう言う事は出来ないと思っています。一側面からの捉え方でたった一つの正解にたどり着くものではないと思うからです。

その中で確かなことは、国があることは当たり前じゃない。平和な日本も当たり前じゃない。命と引き換えに、守ってくださった方々がいて、守っていただいたものなのだという。ほんとうに感謝しきれないと思いました。

今回高校生がたくさん参加されていて、彼らと私の年齢は当時の特攻兵とトメさんの年齢とほぼ同じ。

遺書の文字の美しさや精神性の高さ、写真に写る凛々しい姿を見ると、もっともって大人なような感覚でいたけれど、17歳って、まだまだこんなに若い。

そしてトメさんの器の大きさに、自分にとってもお母さんくらいの感覚でいたけれど、私と同世代。

果たして自分は、彼らやトメさんのように、今自分の命を最大限使って生きているといえるだろうか。

そんなことを考える機会にもなりました。

どう生きて、どう在りたいのか。

先の時代に守ってもらったもの、与えてもらったものに対して、どう応えていきたいのか。

この先、ずっとこの大きな問いの答えを自分なりに考えながら生きていきたいと思いました。

素晴らしい機会を与えていただいたことに改めて感謝いたします。

② 平和のために私ができること

まずは、自分の周りの人を大切にすること。

そして歴史を学び、感謝を忘れないこと。

自分が学んだことを、伝えられる範囲で伝えていくこと。特に自分のこどもたちは戦争を知っている世代とも隔たりがある世代になってしまうので、少しずつでも伝えていけたらと思います。

知覧を訪ねて

一般参加
星野 みゆき

① 現地学習で特に印象に残ったこと

己の不勉強を恥じつつ紹介する。50年近く生きて来たが、この鹿児島の旅で初めて聞く言葉があった。それは「掩体壕」である。知覧は今回で3度目の来訪であったがガイドさんに説明を頂きながら初めて復元地に行けた事も大変勉強になった。

また学習会で思い出した言葉がある。それは「傷痕軍人」。40年ほど前になるだろうか、年末年始に牛伏寺へ家族でお参りに行くと暗い道路の傍らに義手を嵌めた方が2～3人程座っていて幼い自分には、戦争に触れる瞬間としてとても怖く感じた。

自分が生まれる少し前まで、沖縄に行くのにはパスポートが必要だった事を母から聞いた事があるが、まるで遠い昔の事のような気がしていた。学習会では、長崎出身の方から平和教育の温度差を感じる事もお聞きする事が出来た。三角兵舎があった地を実際に踏み感じた事は、今からは想像もできない様々な規制がある生活の中で、物資も枯渇し終わりの見えない厳しい毎日に、どのような事に喜び、明日への希望を見出していたのか。私たちは平和な日常を送れる喜びを当たり前のように感じて過ごしているが、生きたくても生きられなかった人たちを思う時、今を大事に丁寧に生きないといけないと思った。一部の世論やマスコミに流されず真実を見極める事、昔の事、他人事ではなく「自分事」として受け止める事。それを家族や身近な人と話し合う事、個人で出来る事は少ないが過去の歴史から学ぶ事は多い。戦後80年、今の平和な世の中からは想像も出来ないような痛ましい犠牲の上に、今の平和な生活が成り立っている事を実感した。戦争の悲劇を「過去の出来事」として終わらせるのではなく、松本と鹿児島をつなぐこの学びの機会に感謝し未来に向けてどう行動すべきかを考えるきっかけを得た気がする。

② 平和のために私ができること

私の生まれ育った大好きな松本も海外からたくさんの観光客を目にするようになった。

よくぞ松本を選んで訪れて下さったと思う反面、松本で生まれ育った自分より時として海外の方の方が詳しい時もあり、住んでいながら知らない自分が恥ずかしいと思う事さえある。今回、鹿児島での平和学習を通じて、戦争の悲劇と命の尊さを学ぶ事が出来た。

先人の犠牲の上に成り立っている平和な現代を生きる私にできることは、まず過去の日本について知る事、継続して学ぶ事から始めたい。

また、日常の中で相手を思いやる心を持ち、相手の立場になって考える姿勢を大事にすることも、平和への一歩だと思う。個人の小さな行動でも、積み重ねることで社会を変える力になると信じたい。これからも平和について考え、行動し続けていきたい。

平和学習に参加して

一般参加
小金丸 恵理子

① 現地学習で特に印象に残ったこと

まず、特に印象に残ったことという課題をいただいてもまとめられないので、感想文のようになることをお断りしておきます。

特攻から考える平和学習ということで興味を持った理由は、修学旅行などでいわゆる平和学習をしたことがなかったからです。原爆資料館も長野市の松代大本営も行ったことがなく、「日本人として知らなくていいのだろうか」と現地に行く機会を作ろうと思っていました。とはいえ私は歴史が苦手で、しっかり学んでいませんでした。事前学習も理解できるのだろうかと不安でしたが、とても分かりやすく良かったです。真珠湾攻撃、アジアの人たちの反日感情、特攻隊など、今まで点々と聞いていた事柄がやっとつながったような気がしました。

松本から鹿児島へ行くときに団長が、同じ空路で行った隊員がいたという話をされて、まさにここもそういう場所だったのだと思いました。

鹿児島では、万世特攻平和祈念館、知覧飛行場跡地の戦争遺跡、知覧特攻平和会館を訪ねました。学芸員やガイドさんにいろいろな事を教えてもらいました。展示を見ても、話を聞いていてもふと涙があふれてくる。そんな一日でした。

町にはあちこちに灯ろうがありました。その歴史を考えると、特攻隊の隊員、彼らを支えた町の人たち一人一人の、生きざまというか、どう生きたかの証のように思います。戦時中に生きた人々の思いを知り、受け継いできた人がいる。そんな町だから、灯ろうからも感じるものがあるのではないかと思います。

② 平和のために私ができること

命を大事にする。生命は何物にも代えられないものだということをだれもが思えるようになる社会にしていきたい。

子どもだけでなく、大人も一人一人がかけがえのない存在であることを忘れないで生きていきたい。

核家族で三世代の交流が薄れていて、祖父母などでも人の死に向き合うことができなかつたり、少子化で大事に育てられるので、怪我やけんかなどで傷つく経験が少なかったりなど、子育ての環境が大きく変わっていると思います。子どもたちのために今の時代にできることは何か。やり方も、伝え方も正解はひとつではないと思います。この方法で正しいのか答え合わせのできないものかもしれません。

未来は子どもたちに託すしかないので、かかわる事がある限り知恵を絞って、生きてるって幸せって言うようにすごしていきたいです。

知ること、伝えることの大切さ

一般参加
清水 英昭

① 現地学習で特に印象に残ったこと

知覧は日本人として知っておくべき事だと思い、以前から一度行ってみたかった場所で有りながら距離的な問題もあって中々実現しませんでした。今回参加した一番の理由はチャーター機でダイレクトに行けることでした。

今回この様な貴重な体験を企画して頂いた松本市及び松本市青年会議所に改めて感謝申し上げます。

知覧は全国的にも知れ渡っていますが、今回、「万世特攻平和祈念館」や「戦跡・史跡巡り」もでき、予定から削除された「ホテル館 富屋食堂」にも行けたのが良かったです。

特攻隊員の方々の遺影、遺書、遺品の数々を目の当たりにし、「敵の艦船を一隻でも沈めれば、家族や兄弟や愛する人たちが救われるかもしれない」と考え、「戦争が終われば、後に残った人たちが自分の分まで一生懸命に生き、日本の発展に努めてくれるに違いない」そう信じて若くして空へと消えていった特攻隊員の無念さと命の大切さを改めて知ることが出来ました。

近年の世界情勢は、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区への無差別攻撃、中国の尖閣諸島への日常的な領空・領海侵犯、北朝鮮という無法者国家の存在と、かつてないほど日本を取り巻く安全保障の危機が迫っていますが、いかなる場合でも戦争は決してあってはいけないことです。戦争は時に特攻の様な惨劇をも生みます。

だからこそ、風化させてはならないし、美化してもいけない。その為にも真実を知り、戦争の惨さ、命の尊さ、平和の有難さを語り継ぐ事が大切だと改めて思いました。

私たちは親が戦争体験者なので戦争の話を聞くことが出来ましたが、それ以降の世代の人達は生の声を聞くことがないので、こういう資料館などで是非知ってほしいと思いました。

② 平和のために私ができること

日本人なら広島、長崎の原爆資料館、沖縄の戦跡、知覧の4カ所は直接その場所に行って、保存されている史実を直に見て、歴史を正しく理解した上で子や孫たちに伝えていく事こそ、それは戦後に生き残った日本人としての義務であると考えます。

一部の政治家が根拠もなく歴史を修正するような発言をする事を知り、非常に危惧しており、特に国会議員だけでなく地方議会議員も含め政治家なら全員がそうして欲しいと願っています。

今から80年前には、明日生きようとしても生きる事の出来ない時代があったという事を胸に刻み、特攻の人達の分まで毎日を一生懸命に生きて充実した人生を送りたいと改めて思いました。

知覧を訪れて

一般参加
飯島 直美

① 現地学習で特に印象に残ったこと

知覧飛行場跡地の戦争遺跡を回り、実際に特攻の方々が生活していた場所をガイドさんの説明をしていただきながら見学し、きれいな知覧の空気のと全く違う当時のことを想像することができた。

当時、機械などではなく手作業で穴を掘り身を隠す場所（蛸壺）を作り身を守り、土を積み上げ飛行機を隠す掩体壕を作り飛行機を守る、人力で飛行機を運ぶ大変な労働だったんだなあ。

うっそうとした森の中に三角舎を作り、身を寄せ合って眠る、心情的にも環境的にもとても熟睡なんてできないよな。平和記念会館にあった寄せ書きや家族に宛てた手紙をこの環境の中書いたんだなあ。灯だって満足になかったことも想像したりして。

特攻隊に神風が吹くことを信じ、飛行機の整備をしたり、隊員のお世話をする女学生、どちらもいつ爆弾が飛んで来るかわからない死と隣り合わせの場所でそれぞれの役割を全うする。

特攻隊員は、この手紙に綴った最後の思いすらかなわなかった。最後に会いたいと願った人にも会えない。その家族もまた、同じ思いであったことでしょう。だから、送られてきた荷物の包みまで、大切に保管している。最後の時をどんな思いで送ったのでしょうか。

学びの学習発表会では、年代別に感じるところが違うのも実感しました。

② 平和のために私ができること

戦争に関する資料館は他にもたくさんあるのでもっと訪れたいと思いますし、戦争をテーマにした映画・書籍を通じて悲慘さや背景などの知識を深めていきたいと思っています。

その得た知識や経験を周りの人にも、お話する。

子供たちにもその体験ができる機会を増やし、自分の目で見て感じ、考える機会を与えていく必要があると思います。

小さな日常の生活の中で、平和に感謝しこの平和が続くような判断と行動ができるようならなくてはいけないと思っています。

被爆地長崎と知覧 伝え方の差異

一般参加
平川 賀雄

① 現地学習で特に印象に残ったこと

平和学習にはいろんなアプローチ方法があると思いました。

この研修では特攻に関わった人及び残された家族の無念さや希望を絶たれる非情な状況から、平和というのは当たり前のものではなく先人の犠牲や将来を託して散っていった方々の礎の上に成り立っていることを確認できました。

私は被爆者二世です。長崎では義務教育の始まる小学校入学と同時に、徹底した平和教育が当時なされていました。

現地の被爆者はその体験をまず語ろうとはしません。それはあまりにも生々しくグロテスクで、トラウマという簡単な言葉では言い尽くせない思い出したくない辛い過去の感情からだと思います。

私も思わず目を背けたくなる本物の遺物や写真を見てきました。戦争は人を人ならざる者に変える恐怖の側面、原爆を三たび許さないという怒りの側面、子供や若者を失いたくないといった祈りの側面からも学んできました。

今回心に突き刺さったことの中に、バスガイドさんが自分の子供に「あなた達が戦争体験者に直接話が聞ける最後の世代よ!!」と言い聞かせている話があります。

この当然で不可避な事実をどうして普段忘れていたのか?まるで失って初めて気付いて後悔するようなものです。

知覧や靖国神社に残された無念の思い、沖縄激戦地の悲惨さ、長崎-広島のような残酷さ。伝え方感じ方はそれぞれです。信州にも上田無言館や松代大本営跡地があります。語り継げるもの残していける物は何とか後世にバトンを渡し、慰霊や鎮魂といった気持ちを忘れてはいけなと改めて思いました。

② 平和のために私ができること

無関心でないこと。

一旦誤った方向に舵を切ると悲惨な状態に陥るのは、アッという間です。それは数々の歴史が証明しています。

今 ロシアでは子供に銃を持たせて軍国主義を叩き込み、戦うことが愛国だと教え、それに反対する人を追放したり逮捕しています。

これは遠いよその国の話でしょうか?わずか80年余り前の我が国の姿です。

「戦争を知っている世代が政治の中枢にいるうちは心配ない。平和について議論する必要もない。だが戦争を知らない世代が政治の中枢となった時はとても危ない」田中角栄元首相の言葉です。

8月ジャーナリズムと揶揄されることもありますが、平和の尊さという中心軸だけはブレないよう思い返すことも大事です。

現地学習で特に印象に残ったこと

一般参加
坂本 和子

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回参加した理由は特攻隊員と浅間温泉の旅館で子供たちとの触れ合い、後日知覧に向かったという歴史を10年ほど前に浅間温泉の歴史で資料を読みました。知覧という場所から特攻隊員が出撃をしたことをその時に知り知覧に行ってみたいと思っていました。

特攻隊員はお国の為という大義名分で命を散らす事になりましたが、一人ひとり思いは皆、違っていたはずですが。遺書をみていると自分のことでなく家族を心配する文がほとんどでした。暖かい家族に思いをはせ、自分の家族の未来の為に命を落としていったに違いありません。又、特攻隊員にとめさん・女学生・子供たちとの触れ合いに心穏やかに少しでも心満たされ、慰めにもなったに違いないでしょう。銃などをもって敵と戦っている兵士と同じで、とめさん・女学生は心の中では泣いていたと思いますが、いつも笑顔で接していることが戦っていることでこれも戦争だと思います。

当時は報道の自由がなく統制される中、国民の考えも同じ方向に向いてしまった恐ろしさ。これは現在でも新聞・報道番組等を100%信ずるのでなく内容を見極めることが大切で、平和学習などでいろいろな知識を自分なりにもっていることのも重要だと思いました。

戦争をしないという平和学習を小学生の時から年に何回か必要で、その上で現地学習につなげていければ日本の未来も明るいのではないのでしょうか。(長崎出身の方が地元での平和学習と他の地域での格差があることに驚かれたということもお聞きしました。)

② 平和のために私ができること

戦争がないことだけが平和ではないと思います。尊厳をもって安心して暮らせることはもちろん、自分を大切に成長できるような世の中で生きていけることではないのでしょうか。何事もなく穏やかな日常を大切に毎日感謝する気持ちで過ごしていければと思います。

戦争は決して行ってはいけないという強い気持ち、そして、世の中に関心を寄せ、流されない自分の意志を持つことではないのでしょうか。

鹿児島研修の所感

一般参加
坂本 寿男

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私の年代は、戦争に対し今よりも少し身近に感じられた。傷痍軍人が駅前・街中にいたような時代を経験し、プラモデルでかっこいい日本の戦闘機や軍艦、戦車を作って遊んだ世代である。

数十年の空白があり、松本市に住むようになって上田の「無言館」や松本の五十連隊を学び、松代大本営の地下壕を訪れ、終戦近くの日本の状況・思想・方向等を学ぶ機会があったので、今回戦後80年（昭和百年）の節目に当たり、改めてここ鹿児島・知覧を訪れることができたことは、昭和世代として知識や気持ちの整理をする意味で大変うれしく思っている。

今後、広島、長崎、沖縄なども機会があれば今回の研修の延長として訪れてみたいと考えた。

万世・知覧の特攻平和祈念館もだが、中でも最も感情を揺さぶられたのは、「富谷食堂」の風情と展示だった。特攻隊員一人ひとりの想いと、その家族、周りにいた一人ひとりの想いを写真や手紙などの展示品で目の当たりにし、そのまま80年前に引き込まれてゆくようだった。

特に印象に残っている話は、鹿児島のある女性の話である。

終戦近くに勤労奉仕の女学生として軍需工場で武器の製造に携わっていた時、自分達が何を作っているのか、その時はわからなかったそうだが、後になってそれが「回天」という人間魚雷、特攻の道具だったことを知り、暗澹たる思いになったという話だった。

② 平和のために私ができること

戦後80年を過ぎ、戦争の記憶が年々薄れてゆくが、その中で歴史認識を修正する、あるいは歪曲するような戦争を正当化する主張や排外主義が世界中にはびこってきている現状に危惧を覚えている。

今日SNSの時代、我々や若者たちは、きっかけ・チャンスがないと自分の知らない情報に目を向けにくくなりつつある。自分の好きなことしか見ない、聞かないといった情報の偏りが先入観や偏見を生むことに常に危機感を覚えつつ、AIやフェイクに惑わされずに多くの情報を取り込み、自分で咀嚼し判断して取捨選択できるようにしてゆくことが肝要であると感じた。

知覧へ訪れての平和学習について

一般参加
平林 正浩

① 現地学習で特に印象に残ったこと

まず、このような学習の機会を提供して頂いた松本青年会議所、そして松本市の平和推進課の皆様に心より感謝申し上げます。歴史を知るということはとても重要ですし、これからの未来を担っていく子供達のためにも、今回と同様な学習の場が提供され続けることを切に願っています。

「特攻」「知覧」という言葉は知っていても、現地に赴いて実際にその場所を見て、空気を感じ、写真や遺書の実物を目にし、現地の方との学習を深める中で、改めて今の日本の平和のありがたさを感じることができました。

当時の価値観の中で実行された特攻という行為については、決して美化できるものではないですし、国を守るために、国民が命を捨てても良いというものではないと思います。

国とは何か、国民の幸せとは何か、深く考えさせられる機会となりました。

日本は皇紀2685年という、世界でも最も歴史の長い国の一つです。これだけ長く日本という国が続いてこられたのは、他者を思いやる日本人としての精神があったからではないでしょうか。

戦後、日本の教育が大きく変えられ、日本人として本当に大切にすべきアイデンティティのようなものが薄れてきているように感じます。

今回の現地学習を通して、一次情報の大切さを実感しました。インターネットやスマホの普及により、日々私たちが接する情報量はとて多くなっています。その中で何が重要で何が重要でないか、取捨選択する能力、そして自分自身の目で見て、感じたり、判断することがとても重要だと感じました。

「平和」という言葉の意味についても、国や民族によっても解釈が違ふと思います。平和を考える上では、私たち自身がもっと日本がどのような国なのか学ぶ必要がありますし、他者（国や民族）についても理解を深めることが必要だと改めて感じています。

② 平和のために私ができること

私自身が平和についての学習をやめないことだと思います。そして今回のような体験を多くの人に伝えていくことだと思います。昨今、地政学的に見てもさまざまなレイヤー（海、空、宇宙、サイバー空間、水、食、産業、土地、金融、等）で日本は危険な状態にあると感じています。私たちの「生活」だけを考えれば、目の前のことにだけ集中すれば良いかもしれませんが、「子供達の未来」を考えた際には、最悪のシナリオも想定しながら、行動していくことが求められてくるのだと思います。かつ、そこまでの未来を考えて行動できる人に政治を担ってもらいたいとも思うので、選挙に行くことの重要性も周囲に伝えていきます。

戦争の記憶と平和への私の思い

一般社団法人松本青年会議所
小林 祐華

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は、鹿児島県南九州市での特攻についての現地学習において、知覧特攻平和会館、万世特攻平和祈願館、ホテル館富屋食堂を訪れました。

どの施設でも、特攻隊員たちがどのような思いで出撃していったのかを知り、心に深く残りました。

20代前後の若い隊員達が家族・国の将来の為にという想いを胸に出撃したとき残した遺書や血書には、死を目前にした隊員たちが家族や恋人へ感謝の気持ちを伝える言葉が綴られており、「怖い」という本音を書くことさえ許されなかった時代の重さを感じ、胸が締めつけられました。

また、ホテル館富屋食堂では、「特攻の母」と呼ばれた鳥濱トメさんの生涯を通して、特攻隊員と彼らを見送った人々の思いを知ることができました。

彼女が特攻隊員たちに心を込めて食事を作り、息子のように見送り続けていたことに、深い愛情と悲しみを感じました。

現地を訪れて感じたのは、特攻隊員たちは決して喜んで死んでいったわけではないということです。

彼らには愛する家族や恋人がいて、将来への夢がありました。

しかし、時代という大きな流れの中で、その命を差し出さざるを得なかった——その事実を前に、改めて「平和の尊さ」を強く感じました。

また、長野県出身の特攻隊員についてのエピソードもあり、遠く離れた鹿児島と自分の住む地域がつながっていることを実感しました。

こうした縁を通して、戦争の記憶を「自分ごと」として受け継いでいくことの大切さを感じました。

② 平和のために私ができること

私はこれまで、戦争というものを深く知らずに生きてきました。

祖父や曾祖父、そして学校では教科書を元に学んでいますが、実際に戦争を体験したことはありません。

戦後80年の今、日本は「戦争をしない国」として歩んできました。私もその中で育ち、平和の中で生活できることを当たり前のように感じていました。しかし、戦争をすることが現実になった場合、「人の命が最も大切」という考えが失われてしまうのではないかという不安を抱きました。

だからこそ、私はこれからも戦争をしない方法を選び続けることが大切だと思います。

そのために、まずは自分自身が戦争の歴史を学び、現地で感じたことを家族や友人に伝えていきたいです。

一人ひとりが未来を決める選択を意識することで、平和な社会を続けていく力になると思います。

戦争を「過去の出来事」として終わらせるのではなく、平和を守るための学びとして伝えていくことが、私にできる第一歩だと感じました。

平和は誰かが守ってくれるものではなく、一人ひとりが「争わない選択」を重ねていくことで続いていくものだと思います。

これからも学びを忘れず、平和な未来を選び取る力を持ち続けたいです。

教育の重要性

一般社団法人松本青年会議所
小岩井 昌門

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は鹿児島県南九州市の知覧特攻平和会館を訪れ、特攻に出撃した若者たちが残した手紙や遺品、展示、語り部の話に触れた。そこで最も胸に残ったのは、「国のため」「天皇のため」「家族のため」と使命を優先し、10代という若さで死を覚悟した若者たちの姿である。この感覚を理解しきれないと感じた背景には、受けてきた教育の違いが大きいと考えた。当時は天皇を神とする価値観のもと、使命を授かることが名誉であり、国のために尽くすことが美德とされていた。一方、現代の教育は個人が考え選択する力を重視し、多様性や批判的思考を育てる民主国家としての価値観が基盤にある。この違いから、教育の在り方が国家の未来さえ大きく変えうるのだと強く感じた。また当時、「日本が負けるはずがない」と信じていたという女学生の証言から、情報統制が人々の認識や判断を奪う危険性も改めて実感した。一方で、特攻兵の日記には「独裁国家の終わり、民主国家の重要性」が綴られたものもあり、必ずしも全員が戦争に賛同していたわけではなく、多様な考えが存在していたことも見えてくる。しかし国の方針に異を唱えにくい空気の中で、個人の意志を表現できる社会ではなかった。異なる考えを尊重せず、一方的な価値観を強いる社会は長くは続かない。知覧での学びは、命の尊さだけでなく、自由に考え表現できる社会と教育の重要性を改めて問い直す機会となった。

② 平和のために私ができること

私は、戦争の悲惨さを学び、それを語り継ぐことが最も重要だと感じた。同じ体験をしても若者一人ひとり感じ方や考え方は異なり、だからこそ互いに意見を交わし、平和のために何ができるかを共有する必要がある。日本が戦後大きな戦争に巻き込まれていないのは、戦争を「してはいけないもの」と教えてきた教育の力だと思う。この価値ある教育を守り続けるために、大人は社会構造を見直し、誰も取り残さない教育制度を築くべきだ。学校だけでなく家庭でも平和の大切さを伝え、暴力ではなく対話で解決する社会を次世代に繋いでいきたい。

戦争の教訓と平和の願い

一般社団法人松本青年会議所
上條 僚士

① 現地学習で特に印象に残ったこと

知覧・万世特攻平和祈念館を訪れ、最も心を揺さぶられたのは、特攻隊員の中に、私と同じ幼い子供を持つ父親たちがいたという事実でした。家族との未来への希望を断ち切れ、幸せな日々を奪われた無念さを思うと、胸が締め付けられます。

彼らの遺書や手紙からは、死を前にしても家族への愛情、故郷への想いが溢れていました。愛する人を残して逝く無念さ、それでも国のためにと決意した覚悟が、痛いほど伝わってきます。同時に、彼らを送り出す家族、上官、地域の人々もまた、悲しみを押し殺し、気丈に振る舞わざるを得なかったであろうことに思い至りました。戦争という異常な状況下で、皆が深い心の傷を抱えていたはずです。

特攻に関わった全ての人々が、それぞれの立場で悲しみや苦しみを抱えながら生きていた。その事実は、言葉では言い表せないほどの重みを持って、私の心に深く刻まれました。子供を持つ親として、彼らの無念さ、家族の悲しみを想像すると、平和の尊さを改めて深く感じました。二度とこのような悲劇を繰り返してはならない。その思いを胸に、私は平和のために何ができるのか、真剣に考えていきたいと思います。

② 平和のために私ができること

今回の訪問を通して、今この瞬間にある平和がいかに貴重なものであるかを改めて認識しました。この平和は、多くの犠牲の上に成り立っていることを決して忘れず、感謝の気持ちを持って日々を過ごしていきたいと思います。

与えられた時間を大切に、家族や友人との絆を深めていきたいと考えています。何気ない日常の中にこそ、平和の尊さ、幸せの原点があることを忘れずに、日々の生活を丁寧に積み重ねていきたいと思います。

また、現代社会においては、インターネットやSNSを通じて、様々な情報が溢れています。中には、事実に基づかない情報や、特定の意図を持って拡散される情報も少なくありません。特攻隊員たちが、情報が統制された時代において、祖国のために命を捧げたように、現代社会においても、私たちは常に情報に対して批判的な視点を持ち、何が真実なのかを見極める力を養う必要があると感じました。

平和への決意を新たに

一般社団法人松本青年会議所
山本 篤司

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回の現地学習では実際に自分で飛行場跡地、出撃を見送った場所、戦争遺跡に赴き、特攻隊員の遺影や遺品、所感に触れ、五感で感じられた事が貴重な経験となった。その中でも、安曇野市出身の上原良治さんの所感が強烈に印象に残った。当時の軍国教育を受けてきても、状況下を理性を以って、日本の敗戦を確信し権力主義は最後には敗れると憂いていた上原さんのような方がいた事に感銘を受けた。もっと生きたかった気持ちを最後まで隠し、「明日は自由主義者が一人この世から去っていきます」という言葉を残して飛び立たれた心中を想うと命と自由の尊さ、大切さを想わずにられません。出撃を見送った場所に立ち、開聞岳を眺めながら一つしかない命を投げ捨て一式戦闘機で飛び立っていった特攻隊員に想いを馳せた後に、多くの所感を読み、考える時間が持てた事がこのような想いになれたのではないかと思います。一緒に参加した松本の若い世代が、大人以上に真剣に向き合っている姿を様々な場面で眼にし、参加前の私の想像をはるかに超えた光景でもあり、将来に向けて大いに期待が持てた。また今回のチャーター便は、「平和学習」という今までにはなかった目的と視点で長野と鹿児島を結ぶ新たな一歩になったと思います。南九州市の地域をあげての「平和学習」にける本気の想いも感じ取る事ができました。今後、信州まつもと空港と鹿児島空港間で定期便が実現すれば、「平和学習」を目的とした交流が始まり、今回の我々と同じような経験をする人が増えていく事に繋がっていく事と確信します。

② 平和のために私ができること

愛する家族に今生の別れを告げ、日本を偉大ならしめん事を我々に託し、命を捧げた先人たちの犠牲の上に今が成り立っている事を忘れてはいけないと決意を新たにしました。現地に赴き、特攻隊員や支えた人々に想いを馳せ、自分の五感で感じた事を伝え、戦争を知らない人たちに訪ねてもらえるようにしていきたい。わずか80年前に日本で何が起こっていたのか、先人たちは何を思い命を捧げたのかを知り、命の尊さと平和のありがたさを実感する人が増えていき、しいてはそれが世界恒久平和実現へと繋がっていきます。また立法や行政の行為により国民の自由が脅かされる事がないよう立憲主義の原理に基づき、そのような危険性があると感じた時は声を上げ行動しないといけないと思いました。

表と裏 — 万世と知覧で感じた“生”と“死”の境界 —

一般社団法人松本青年会議所
副理事長 増田 春樹

① 現地学習で特に印象に残ったこと

万世平和博物館で見た当時の新聞広告が、今も心に残っている。株価の動きやテーラーの宣伝が並ぶ紙面の片隅に、特攻出撃の記事が載っていた。その一枚から、人々の暮らしのすぐ隣に「戦争」があったことを強く感じた。穏やかな日常と非日常が交錯する、その“表と裏”のような現実言葉に言葉を失った。

また、知覧特攻平和会館では、1,036名の特攻隊員が命を落としたこと、そして同じ頃、沖縄では約5,000名のアメリカ兵も亡くなっていたことを知った。どちらの側にも、家族や友人、大切な日常があった。そのことを思うと、戦争の悲しみは国や立場を超えて、人の心に深く残るものだと感じた。

② 平和のために私ができること

鹿児島で感じた「表と裏」は、戦争だけでなく、今を生きる私たちの心にもあると思った。喜びの裏には悲しみがあり、穏やかな暮らしの陰で、苦しみや不安を抱える人もいる。

家族や大切な人を思う気持ちの裏にも、どうすることもできない葛藤や迷いがある。それでも人は、その思いを抱えながら日々を生きている。

平和とは、そうした心の揺れを受け止め、自分の中で何を大切にして生きるかを考え、選び続けることだと感じた。

まずは、自分にできることを丁寧に行い、物事の片面だけでなく、その裏にある背景にも目を向けていきたい。

そんな小さな姿勢の積み重ねが、きっと穏やかな社会へとつながっていくのと思う。

知覧で学んだ“いのち”と向き合う時間

一般社団法人松本青年会議所
高山 未央

① 現地学習で特に印象に残ったこと

今回の知覧特攻平和会館での学習では、展示された多くの遺書や遺品を通して、特攻に向かった若者たち一人ひとりに確かに存在した“人生の重み”を強烈に感じました。

昂揚感を装って自分を奮い立たせた人、時代と環境を静かに受け止めながら出撃していった人。そこには、教科書だけでは触れられない、等身大の感情と葛藤がありました。特に心に深く残ったのは、鳥浜トメさんが営んだ「富屋食堂」（現・ホテル館）に残る隊員たちの記録です。十七歳で散った少年、故郷の歌を歌って別れた朝鮮半島出身の青年、仲間を救うため危険を承知で海に漕ぎ出した隊員の話。それぞれの“生きた人間としての姿”に触れた瞬間、胸が詰まり、涙がでました。

そして、安曇野出身の上原良司大尉の存在は、私にとって特別に心を揺さぶるものでした。同じ信州の地で生まれ育った青年が、自由主義の思想を大切にしながらも時代に引き裂かれ、最後まで自分の言葉で心境を綴り、空へと消えていったこと。その複雑な胸中や、恋人への静かな想いが遺された言葉から伝わり、「戦争は個人の人生をどれだけ奪ってしまうのか」という現実を突きつけられました。知覧で見たもの・感じたものは、単なる歴史の一場面ではなく、“確かに生きていた若者たちの人生そのもの”。その一つひとつの命の尊さを胸に刻む学びとなりました。

② 平和のために私ができること

知覧で感じたことは、「平和は、誰かが守ってくれるものではなく、私たち一人ひとりが日常の中でつくっていくものだ」ということです。

母親として、私は子どもたちに“命の大切さ”と“違いを尊重する姿勢”を丁寧に手渡していきたいと思います。特攻で散った若者のように、時代によって人生の選択肢が奪われることが二度と起きないように、家庭という最も身近な場所から「平和の感性」を育てることが、私にできる行動です。

また、地域で働く一人の経済人として、多様な人が安心して暮らせる地域社会をつくる取り組みに力を注いでいきたいと考えています。異なる背景・立場の人々が互いを尊重しながら協働できる環境を整えることは、分断を生まない地域づくりに直結し、平和の基盤になります。平和は特別な活動の先にあるものではなく、目の前の命を大切にし、日々の選択を丁寧に積み重ねることそのものだと思います。

松本から知覧へとつながった今回の学びを忘れず、母として、地域の大人として、そして一人の市民として、“未来へ平和を手渡す”行動を続けていきたいと思います。

時代を超えて受け継ぐ、大切なもの

一般社団法人松本青年会議所
山元 秀一郎

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は松本青年会議所の会員として、鹿児島県南九州市へ訪れ、特攻についての現地学習を行った。

その中で最も印象に残った事は、17歳から32歳という若さで特攻隊として飛び立った当時の若者が残した遺書の文章表現である。

極めて短く、整った言葉で書かれた文面からは、死を目前にしてもなお、家族を気遣い、自らの役割を果たそうとした心の在り方がうかがえた。また、そこに綴られていた言葉は決して一色ではなく、恋人への想いや、仲間との日々に触れた文章も多く存在した。

それは「各人が当時の自分の大切なもの」を確かに抱えていた事実を示しており、私の胸に強く残った。私たちが生きる現代にも家族、恋人、仲間、仕事、地域、国など、それぞれが大切にしている対象が存在する。それは時代が変わっても普遍である。

この現実と向き合い、「今、自分の大切なものに集中できている有難み」を深く認識する機会となった。知覧は「いつか行こう」と思っていては遅い場所であったと痛感するほど、訪問した意義が大きかった。

今を生きる自分が、見て、感じて、受け止めたことに大きな意義があったと強く思う。いつか自分の子どもが高校生になる頃に、もう一度知覧を訪れ、次の世代へ学びをつなぐ役目を果たしたいと考えている。

② 平和のために私ができること

私が平和のためにできることは、まず「当たり前にある日常の尊さ」を忘れないことである。

今回、特攻の歴史を学んだことで、戦争に限らず、災害等も含めて、日常が崩壊することは誰にでも起こり得ることだと理解した。

だからこそ、私は自分の大切なものや人を大切にする日々を続けたい。

そして、自分が学んだことを、言葉にし、世代を超えて伝えていく役割を担うべきであると考えます。

私はこの学びを自分個人の感情に留めず、次世代、特に子どもや若者にも橋渡しし続けたい。

今回の経験を未来に還元することが、私自身が平和のために果たすべき責務である。

平和を承継する責任

一般社団法人松本青年会議所
澤地 雅弘

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私たちは、戦後80周年という節目の年に知覧を訪れることができた。二日目の戦跡めぐりの際、印象に残る出来事があった。ガイドから当時の知覧の様子を説明してもらっていると、現地の年配の女性とすれ違った。その方は私たちに「どこから来たの?」と尋ねた後、「ここは昔、一面が飛行場で、滑走路しかなかったのよ」「戦争が激しくて学校にも行けなかったの」と当時の経験を語ってくださった。そして最後に、「今はこんなにいい場所になったね」と笑顔で私たちと別れた。

このとき私は、我が国が15年という長きにわたる戦争を経験し、その戦争が国民一人ひとりの生活に深く関わっていたことを実感した。同時に、焼け野原となった国土を復興させるため、先人たちが血のにじむような努力を重ねたこと、その努力の上に現在の豊かな社会が築かれていることを改めて感じた。

特攻平和会館に残された資料や特攻隊員の遺書を目にし、なぜこのような悲劇が起きたのかを悔やむとともに、平和の尊さと私たちの生きる意味について深く考えさせられた。知覧に残る資料や戦跡、そして現地の人々との出会いはすべて心に強く残り、戦後80周年を生きる私たちが今後何をすべきかを考える大変貴重な機会となった。

② 平和のために私ができること

我が国は、終戦後に日本国憲法が公布・施行された。憲法第9条は平和主義を掲げ、「戦争放棄」「戦力不保持」「交戦権の否認」を定め、国権の発動たる戦争および武力による威嚇・行使を永久に放棄している。これは、我が国が悲惨な戦争を引き起こし、多大な犠牲を強いたことを深く反省し、二度と同じ過ちを繰り返さないという固い誓いの表れである。

私たちは、この憲法の定める意味を正しく理解し、将来にわたって平和の理念を継承していく責務を負っている。そのためには、戦争の記憶を風化させず、歴史から学び続ける姿勢が求められる。また、国際社会の一員として、対話と協調を重んじ、相互理解を深める努力を惜しまないことが重要である。平和とは、単に戦争がない状態ではなく、人権が尊重され、人々が安心して暮らせる社会の実現によって支えられるものである。私たち一人ひとりがその担い手であるという自覚を持ち、日々の行動で示すことこそ、真の平和への道である。

学びを通して気づく“当たり前”の尊さ

一般社団法人松本青年会議所
下川 愛見

① 現地学習で特に印象に残ったこと

私は感情移入しやすい性格のため、これまで戦争に関するテーマにはできるだけ距離を置いてきました。

しかし、年齢を重ねる中で「正しく知っておくことの大切さ」を感じ、昨年は原爆資料館を訪れました。

当初は深い悲しみに包まれると思っていましたが、実際に心に残ったのは「怒り」でした。

なぜその感情が生まれたのかを考えると、「この結末に至るまでに、もっとできることがあったのではないか」という想いに行き着きました。

今回、鹿児島で特攻について学ぶ中でも、同じように複雑な感情を抱きました。

戦争や時代背景を学ぶことで「知識」として理解することはできても、当時を生きた方々の心情を完全に知ることはできません。

私にできたのは、ただ想いを寄せることだけでした。

当時、「国のために命を捧げること」が当たり前とされた時代に、本当の気持ちはどこにあったのか。

特攻を選んだ方の中には、単純に空や飛行機が好きで、その延長線上に「特攻」という選択肢しか残されなかった方もいたかもしれません。

好きなことを貫くための代償が命であったこと、愛する人に想いを伝えられぬまま散っていった方もいると思うと、強い怒りとやるせなさを感じました。

② 平和のために私ができること

ワークショップの中で、自分の感情だけを優先すると、当時の人々の行いを否定してしまう可能性があることを学びました。

だからこそ、怒りや悲しみの感情にとどまらず、戦争の現実を正しく知り、そこから何を学ぶかを考え続けることが大切だと感じました。

当時を生きた方々がどのような想いで日々を過ごしていたのかを想像することは容易ではありません。

けれども、今私たちが享受している「当たり前の暮らし」は、そうした方々の尊い犠牲の上に築かれているという事実を忘れてはならないと思います。

私にできる平和への第一歩は、その現実を心に刻み、日々の生活を丁寧に過ごすことです。そして、戦争の悲しみや命の尊さを正しく次の世代に伝えていくことだと感じています。また、歴史を深く学ぶことで、日常の中にある小さな幸せに気づける人でありたいと思います。

そのうえで、自分の言葉や行動を通して、身近な人にもその幸せを感じてもらえるように表現していきたいと考えています。

今回の学びを通じて、平和を守り、未来へとつなぐ責任を改めて意識しました。

主催 松本市 / 松本青年会議所

戦後80周年記念事業 松本と鹿児島をつなぐ 特攻から考える平和学習

松本は、鹿児島の知覧等を拠点とした特攻部隊が陸軍松本飛行場で飛行訓練を行い、浅間温泉に部隊が滞在していた記録が残されるなど、特攻隊とも繋がりがある地域です。第二次世界大戦終戦80年の節目に、松本の歴史を振り返り、特攻に関する理解を深めます。

<第1フェーズ> 事前学習 どなたでも参加可

日時 ▶ 9月28日(日)10時～12時

会場 ▶ 松本市中央公民館 3-1、3-2

「今、『特攻』の歴史から何を学ぶか —
過去の悲劇から行動する未来へ」

<第2フェーズ> 現地学習 平和視察団

日時 ▶ 10月25日(土)～27日(月)

場所 ▶ 鹿児島県南九州市

対象者・参加費 (旅費・宿泊費・食費込み)

松本市在住 または 松本市に通勤通学する
小学生から20代までの方 35,000円 (先着50名)

※小中学生は保護者同伴でお申し込みください。

教育関係者・一般の方 86,500円 (先着31名)

※現地学習に参加される方は、9月「事前学習」・11月「学習内容の共有」にご参加ください

※10月10日(金)募集締め切り

<第3フェーズ> 平和活動報告会 どなたでも参加可

日時 ▶ 11月16日(日) 15時15分～17時(予定)

会場 ▶ 松本市中央公民館6階ホール



講師

大日方 悦夫 様

須坂市出身。早稲田大学卒業後、社会科教師として長野県内の高校で教える傍ら、地域の近現代史研究に取り組む。県立高等学校長、大学講師など歴任。歴史学研究会、信濃史学会、日本平和学会会員。主な著書(編著):『満洲分村移民を拒否した村長—佐々木忠綱の生き方と信念—』(第32回地方出版文化功労賞奨励賞受賞)、『長野空襲の真実』(以上、信濃毎日新聞社)、『長野県の歴史散歩』(山川出版社)、『資料が語る長野の歴史60話』(三省堂)、『幻ではなかった本土決戦』(高文研)、『韓国と日本の交流の記憶』(白帝社)、『戦争遺跡から何を学ぶか』(岩波書店)、など。



事業詳細・申し込みはこちら
(まつもと平和ミュージアム)



長野県地域発元気づくり支援金活用事業

※必ず旅行条件をご確認のうえ、お申し込みください

※<第2フェーズ>の詳細は裏面をご参照ください

<第2フェーズ> 現地学習：平和視察団 行程表

日時

2025年10月25日(土)～27日(月)

1日目 ▶ 10月25日(土)

12:20 信州まつもと空港集合
13:20 信州まつもと空港発
15:00 鹿児島空港着
16:50 万世特攻平和祈念館(講話付)
19:45 南九州市 宿泊



2日目 ▶ 10月26日(日)

8:30 戦跡史跡めぐり(ガイド付)
11:00 知覧特攻平和会館(講話付)
13:00 郷土料理・知覧茶体験
14:00 学びの発表会(グループワーク、地域住民に向けた発表)
16:00 南九州市発
17:00 鹿児島市着・宿泊

3日目 ▶ 10月27日(月)

9:00 仙巖園
10:00 鹿児島市発
12:30 熊本空港着
13:30 熊本空港発
14:55 信州まつもと空港着



※事業の内容が変更となる場合がありますので、あらかじめご了承ください

お問い合わせ先

一般社団法人 松本青年会議所 まつもと空港2.0委員会
〒390-0811 松本市中央1-23-1
TEL:0263-32-7646 FAX:0263-36-2024
E-mail:jcmnet@po.mcci.or.jp

松本市 総務部 行政管理課・平和推進課
〒390-8620 松本市丸の内3-7(本庁舎3階)
TEL:0263-33-4770 FAX:0263-33-1877

旅行企画・実施 アルピコ長野トラベル株式会社
〒390-0815 長野県松本市深志1-2-30 松本バスターミナル2階
TEL:0263-87-9525 FAX:0263-87-0805
観光庁長官登録旅行業第669号
総合旅行業務取扱管理者:佐藤 陽一



※表面QRコードからお申し込みください。
お電話ではお申し込みできません。

提供 知覧特攻平和会館



過去から 未来へ

平和が紡ぐ
子どもの権利フォーラム



写真：第11回まつもと子ども未来委員会



提供 きむらけん 氏

2025.11.16（日）

会場：Mウイング6階ホール

時間：13:00から17:00



主催：松本市、松本市教育委員会、松本市青少年健全育成市民大会実行委員会、松本青年会議所

80年前、戦火の中で奪われた子どもや若者の自由・希望。
今、私たちができることは何か・・・
子どもの権利と平和な未来について考えます。

第1部

第42回松本市青少年健全育成市民大会・
「松本子どもの権利の日」市民フォーラム

プログラム

- 12:30 受付
13:00 開会式
13:05 表彰式
13:30 「平和とこどもの権利」について
13:40 子どもの発表Ⅰ

蟻ヶ崎高校ダンス部による
ダンスパフォーマンス



- 14:00 休憩
14:05 子どもの発表Ⅱ
まつもと子ども未来委員会による
市への提言



- 15:00 大会宣言

第2部

松本市・松本青年会議所 主催
戦後80周年記念「平和活動報告会」

プログラム

- 15:15 開会
15:20 学習内容の共有
Ⅰ 戦後80周年記念事業（10/25～27）
「松本と鹿児島をつなぐー
特攻から考える平和学習」
現地学習参加者による発表



- Ⅱ 広島平和記念式典等参加事業（8/5～7）
参加中学生による発表



- 16:10 パネルディスカッション
○テーマ
「戦争の歴史を踏まえ平和な社会を築くために」
○参加者
・伊佐治 裕子 副市長
・松本青年会議所 金井 佑輔 理事長
・近現代史研究家 大日方 悦夫 氏
・鹿児島現地学習の若者参加者 3名

- 17:00 閉会

お問い合わせ

第1部

松本市こども若者部 こども育成課
TEL 0263-34-3291
FAX 0263-34-3309
Mail kodomo-i@city.matsumoto.lg.jp

第2部

松本市総務部 平和推進課
TEL 0263-33-4770
FAX 0263-33-1877
Mail heiwa@city.matsumoto.lg.jp
一般社団法人 松本青年会議所
TEL 0263-32-7646
FAX 0263-36-2024
Mail jcmnet@po.mcci.or.jp